

第47回 東海・北陸地区連合小学校長会教育研究愛知大会

愛知大会報告書



期日 平成24年10月18日(木)・19日(金)

会場

分科会
全体会

名古屋国際会議場
日本特殊陶業市民会館
(名古屋市民会館)

第47回 東海・北陸地区連合小学校長会教育研究愛知大会

愛知大会報告書



中部国際空港 セントレア(常滑市)

平成24年10月18日(木)・19日(金)

東海・北陸地区連合小学校長会

愛知大会報告書

もくじ (ページ)

◆ 全 体 会	1	
◆ 愛知大会の開催にあたって	東海・北陸地区連合小学校長会 会長	2
◆ 祝 辞	愛知県知事 (代理：愛知県副知事)	3
◆ 祝 辞	愛知県教育委員会 委員長	4
◆ あ い さ つ	全国連合小学校長会 会長	5
◆ 講 師 紹 介	6	
◆ 記 念 講 演	7	
◆ 分科会運営者名簿	未掲載	
◆ 分 科 会 報 告	14	
■ 第 1 分 科 会	16	
■ 第 2 分 科 会	18	
■ 第 3 分 科 会	20	
■ 第 4 分 科 会	22	
■ 第 5 分 科 会	24	
■ 第 6 分 科 会	26	
■ 第 7 分 科 会	28	
■ 第 8 分 科 会	30	
■ 第 9 分 科 会	32	
■ 第 10 分 科 会	34	
■ 第 11 分 科 会	36	
■ 第 12 分 科 会	38	
■ 特 別 分 科 会	40	
◆ 大 会 宣 言 文	42	
◆ 愛知大会閉会のあいさつ	43	
◆ 次期開催県代表あいさつ	44	
◆ 愛知大会スナップ	46	
◆ 編 集 後 記		

全体会

＝ 大会主題 ＝

新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる
日本人の育成を目指す小学校教育の推進

－確かな学力・豊かな心・健やかな体を養い、
未来に向かって生きる力の育成を目指して－



◆開 会 式

- | | |
|--------------|-------|
| ◇開式のことば | 山内 雅夫 |
| ◇国歌斉唱 | |
| ◇大会会長あいさつ | 坂野 重法 |
| ◇来賓祝辞 | |
| 愛知県知事 | 大村 秀章 |
| 代理 愛知県副知事 | 片桐 正博 |
| 愛知県教育委員会 委員長 | 平石 賢二 |
| ◇来賓紹介 | 林 孝次 |
| ◇祝電披露 | 小森 節男 |
| ◇閉式のことば | 山内 雅夫 |

◆全 体 会

- | | |
|------------|-------|
| ◇全連小会長あいさつ | 露木 昌仙 |
| ◇分科会報告 | 土井 正直 |
| ◇大会宣言文決議 | 岡田 豊 |

◆講 演

- | | |
|----------------------|--|
| ◇演題 小惑星探査機「はやぶさ」の大教訓 | |
| ◇講師 山根 一真氏 | |

◆閉 会 式

- | | |
|--------------|-------|
| ◇閉会のあいさつ | 木村 博彦 |
| ◇次期開催県代表あいさつ | 稲垣 隆 |
| ◇閉会のことば | |



愛知大会の開催にあたって

東海・北陸地区連合小学校長会 会長 坂野 重法
愛知県小中学校長会 会長

会員の皆様おはようございます。ようこそ愛知に来ていただきました。心より歓迎申し上げます。あわせて、愛知県副知事片桐正博様をはじめ、多数のご来賓の皆様方におかれましては、大変お忙しい中、ご臨席を賜りまして誠にありがとうございます。

さて、本県愛知県は、南は伊勢湾、三河湾に面し、東には三河山地、設楽山地の山並みを配し、西には木曾三川により形成されました濃尾平野を有しています。この豊かな自然により、農産物に恵まれ、また、交通経済の要地として栄えてまいりました。戦国時代には織田信長、豊臣秀吉、徳川家康という三英傑を輩出し、その一族郎党が東海・北陸地区だけでなく、全国に広がって活躍をいたしました。本当にこの東海・北陸は先祖祖先をたどると、どこかで一つになっていくのではないかと思います。また、この地域は、からくり人形、瀬戸焼、七宝焼き、有松・鳴海絞りなど伝統的な産業も盛んでございます。この愛知大会に先立ちまして、理事会でからくり人形の玉屋庄兵衛氏をお招きし、お話を聞く機会がございました。そこで「愛知発祥の山車からくりは富山や岐阜など、中部地方にはたくさん残っている。」というお話をお聞きしまして、「中部は一つ、東海・北陸は一つだ。」と、そんな思いをしたところでございます。そのものづくり文化を継承して、近年では自動車、航空産業、ファインセラミックス、エレクトロニクスなどの先端のものづくりが盛んとなり、昭和52年度以降、製造品出荷額は全国一位の座を保っているところでございます。いささかお国自慢が過ぎましたが、このような「恵まれた自然」そして「ものづくり文化」の愛知県に、東海・北陸の小学校の校長先生を多数お迎えし、第47回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究愛知大会を開催できることを大変幸せに思っております。

さて、この愛知大会は、平成20年度より引き継がれてきました全国連合小学校長会の大会主題「新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進」の最終年度として、総括の大会と位置づけられております。あわせて、これまでの東海・北陸連合小学校長会の研究成果の積み上げを大切にしつつ、昨年度の第46回福井大会での研究協議をより発展させていく役割を担っております。こうしたことを踏まえて、副主題を「確かな学力・豊かな心・健やかな体を養い、未来に向かって生きる力の育成を目指して」と設定いたしました。この副主題は教育の普遍的なテーマであるとともに、東日本大震災や経済不況の中で、少し元気がなくなったこの国を元気にする喫緊のテーマであるとも考えております。昨日は1500名もの校長先生が152の小グループに分かれて研究協議をいたしました。大変盛り上がりまして、それぞれの地域、学校の紹介をしながら、校長としてリーダーシップをどうとっていくかという、盛り上がった研究協議を行うことができました。ありがとうございました。

本日はこの後、「はやぶさの大冒険」の原作者であるノンフィクション作家の山根一眞氏の記念講演を予定しております。皆さんご承知のように小惑星探査機の「はやぶさ」は60億キロを7年もかけて、イトカワの微粒子を採取して帰還しました。このはやぶさプロジェクトは世界初の快挙であり、日本の宇宙開発の歴史となりました。この「はやぶさ」をつくるために、数多くの町工場や民間の協力のもと、多数の才能が「集団の知」として結集しました。このプロジェクトチームの「集団の知」と、何としても成し遂げたいという「強い意思」、それを支えた「強い体」、これが「はやぶさの奇跡」の要因だったのではないかと考えております。この成功例からも、これからの日本が国際社会の中で生き残るために、ものづくりという手段を通して「知・徳・体のバランス」のとれた人材育成をすることが重要であると考えらるにいたったところでございます。そして、それが未来に向かって生きる力の育成をめざす小学校教育の使命ではないかと考えております。

最後になりましたが、本大会の開催にあたり、ご指導・ご支援を賜りました愛知県、愛知県教育委員会、名古屋市、名古屋市教育委員会、全国連合小学校長会をはじめ、多くの関係の皆様方に心より感謝を申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。



祝 辞

愛知県知事 大村 秀章

(代理：愛知県副知事 片桐 正博)

皆様おはようございます。ご紹介をいただきました愛知県副知事の片桐でございます。本来であれば大村知事が参ってご挨拶を申し上げるべきところでございますが、あいにく出席ができません。お祝いのメッセージを預かっておりますので、代読をさせていただきます。

本日は第47回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究愛知大会が、このように盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。また、東海・北陸地域の各地区からお越しいただきました多くの皆様に心より歓迎申し上げます。

最近はめっきり涼しくなり、まさにスポーツの秋まただ中ではありますが、今年の夏はロンドンオリンピックが盛大に開催され、日本全国に勇気と感動を与えてくれました。愛知県にゆかりのある選手も14競技20選手が出場し、女子レスリングで3連覇を達成した吉田沙保里選手をはじめ、5人の選手がメダルを獲得するなど見事な活躍を見せてくれました。また、9月29日から10月9日までの間、お隣の岐阜県で、中部地域としては10年ぶりとなる国民体育大会岐阜清流国体が開催されました。今回の国体は多くのオリンピック選手が出場され、大いに盛り上がりましたが、開催県である岐阜県が天皇杯、皇后杯を獲得され、愛知県も総合3位となるなど、この東海・北陸地域の選手の皆さんも大変な活躍を見せてくれました。こうした選手はすばらしい師との出会いを通じ、その力を発揮できたものだろうと思いますが、教える側の熱意とそれに応える選手の努力に教育の本質の一端を垣間見る思いがいたしました。

さて、2年後の2014年の秋に、この愛知名古屋で国連E S Dの最終年会合として、持続発展教育に関するユネスコ世界会議が開催されます。E S Dとは環境、貧困、人権、平和、開発といった社会のさまざまな課題を自らの問題としてとらえ、身近なところから取り組むことを通じて、持続可能な社会づくりの担い手を育もうというものです。この国連E S Dの10年は2005年の愛知万博でキックオフした会議であり、その締めくくりの会合が再びこの愛知で開催されるわけではありますが、愛知県としては万博、そして2010年の生物多様性条約締約国会議、いわゆるC O P 10に続く大規模な国際会議であり、この地域の持続可能な社会づくりの大きな弾みにしていきたいと考えております。2014年までに50校以上という目標を掲げ、現在愛知県内の各学校にはE S Dの理念を実践するためのユネスコスクールへの加盟をお願いしているところでありますが、皆様方にも是非それぞれの地域において、身近なところから持続可能な社会づくりに取り組んでいただきたいと思います。

また、皆様ご案内のとおり、滋賀県の津市でいじめが原因で一人の中学生が命を絶つという大変痛ましい事件が起きてしまいました。一人の子どもがここまで追い込まれたという事実は子どもの教育に携わる関係者はもちろん、社会全体が重く受け止めなければなりません。このような事件が二度と繰り返されることのないよう、私は子どもたちが夏休みにはいる直前の7月20日に「みんなの力でいじめをなくそう」と題した県民へのメッセージを出しました。いじめに関して重要なのは早期発見、早期対応、早期の見守りであるといわれております。皆様には子どもたちの小さなサインを見落とさないよう、子どもたちの友人関係、人間関係に日頃から目を配っていただくようお願い申し上げます。

「教育は未来へつなぐ希望の輪」、これは愛知の教育について募集した標語で、最優秀に輝いた中学1年生の作品です。子どもたちが輝かしい未来を信じ、希望をもって自分の道を進んで行けるよう、まさに教育が未来へつながる希望の輪であり続けなければなりません。そうした教育の実現に向け、本大会が実り多いものとなりますことをご期待申し上げます。そして、校長先生方におかれましては、その豊かな見識とリーダーシップを十分に発揮していただき、これからの社会を担う子どもたちを教え、導いていただきたいと思います。

最後になりましたが、東海・北陸地区連合小学校長会教育研究愛知大会のご成功と、ここにお集まりの皆様方のご健勝と、今後のますますのご活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。



祝 辞

愛知県教育委員会 委員長 平 石 賢 二

おはようございます。ただいまご紹介にあずかりました愛知県教育委員会委員長の平石賢二と申します。

第47回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究愛知大会がこのように盛大に開催されますことを、愛知県教育委員会を代表しまして心からお祝い申し上げます。

校長先生方におかれましては、日頃から子どもたちの健やかな成長を目指して多大なるご尽力をいただいておりますことに対し、まずもって敬意を表しますとともに、心より感謝を申し上げます。

さて、私は、現在大学で子どもたちの心の発達と健康、親子関係などに関する研究に取り組んでおります。また、20数年になりますが、臨床心理士として不登校の子どもとその保護者に対してカウンセリングという形での支援をしてまいりました。子どもたちの心の問題としては、いじめや不登校、非行、それから近年特に重視されている発達障害の問題などがあります。子どもたちの心の問題は、特に思春期年代の中学生において顕在化し深刻化する傾向にありますが、小学校においてもそれらの問題は決して軽視できるものではありません。小学校は子どもの人格や学力の基礎を形成するきわめて重要な時期であり、小学校段階での心の成長、発達の在り方が、後の中学校・高等学校での生活に影響を及ぼすと言っても過言ではないと思います。その意味においても、今大会の主題の中にも掲げられている子どもたちの確かな学力と豊かな心、健やかな体を養い未来に向かって生きる力を育成するということは、間違いなく初等教育における最も中心的な課題であろうと思います。

それではこういった生きる力を子どもたちが伸ばしていくためには、学校現場の課題として何が重要でしょうか。私はここで信頼感という言葉を挙げたいと思います。教師と児童との相互の信頼感、子ども同士あるいは教師同士の信頼感、親と子どもの信頼感、教師と保護者の信頼感。学校現場や家庭においては、このように多くの人と人との関わりがあり、それぞれの関わり方の在り方、質を決定するのがこの信頼感です。人と人との相互の信頼感が大切であるというのはあまりにも当たり前のことではありますが、この当たり前のことをきちんとクリアするのがなかなか難しいのではないかと思います。私はカウンセリングの仕事をしておりまして、時々子どもや保護者の方が相談の場に来ていただけないという経験します。私の方でいくら支援をしたいと考えていても、相手の方の信頼感が得られないと支援をさせていただけないという状況があります。学校現場では、しばしば指導という言葉が使われます。この指導という関係においても、カウンセリングの関係と同様に、相互の信頼感が形成できていなければ真の意味で効果的な子どもの成長を促進する関係は成立しないのではないかと思います。東日本大震災発生以来、我が国においては、人と人との絆が大切であることが再認識されました。この絆を形成する上での必要条件も、やはり信頼感だと思います。学校現場における様々な人間関係において信頼感によって根付いた絆を作り上げるには、それを可能にする学校風土が必要です。校長先生方におかれましては、ぜひこのような学校風土を作り上げ、未来を担う子どもたちの成長を支援するために管理職としてリーダーシップを発揮していただきたいと思います。

最後になりましたが、本日の研究協議会が実り多いものとなりますようご期待申し上げますとともに、本会のさらなるご発展と皆様のご健勝を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。本日はどうもおめでとうございました。



あいさつ

全国連合小学校長会 会長 露 木 昌 仙

おはようございます。ただいまご紹介をたまわりました、全国連合小学校長会会長の露木昌仙でございます。本日は第47回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究愛知大会が開催されますことを、全国連合小学校長会を代表して、心からお祝い申し上げます。

東海・北陸各地区からお集まりいただいた校長先生方におかれましては、昨日の分科会における充実した研究協議で、校長会としての凝集性が一層高まり、本大会も大成功に進められているものと思います。

学校にとって何より重要なことは、先程来出ておりますけれども、子どもたちに知・徳・体のバランスのとれた生きる力、生き抜く力を育む教育課程を着実に進めることであります。質の高い教育を保障すること、安心して安全で防災も含めて、危機管理を適切に進めていくこと、これらの多くの課題に対して、教職員組織が一体となって対応していくことが重要であります。本大会の副主題に、確かな学力・豊かな心・健やかな体を養い、未来に向かって生きる力の育成を目指して、とありますが、まさに、知・徳・体のバランスのとれた生きる力を育む、校長としての研究というふうに感じております。

先程、教育委員長の平石様から、信頼という言葉が大変重要なキーワードであるというお話がございました。私も、その通りだというふうに思っております。私は日頃から、経営力を高め信頼を育む校長会となろう、ということはこの2年間訴え続けてまいりました。そのような校長であるためには、校長が明確なビジョンを掲げ、教職員組織をリードし、自ら先頭に立って、具体的に対応していく、そういうことが大切であると考えております。校長がリーダーシップを発揮し、学校の創意を生かし、本副主題を追求することにより、子どもたちの生きる力が一層高まり、学校の信頼も深まっていくものと確信しております。

さて、今年度から、昨年年第1学年に続き第2学年にも、36人以上の学級に加配措置をするという形で35人以下学級が進みました。私ども全連小にとって、小学校第3学年から中学校3年生まで義務教育すべてにおいて、少人数学級を進めていくことが、今、重要な課題であると考えております。

9月4日に公表されました平成25年度の文部科学省の概算要求では、子どもと正面から向き合うための新たな教職員定数改善計画として、第2期の教育振興基本計画が5年間で進められますが、それに合わせて、平成25年度から平成29年度までの5年間に定数改善を進めるという計画が示されました。改善総数27,800人。25年度には5,500人。金額にして119億円を見込んでいます。これからが財務省との戦いとなります。何としても実現させるため、来月11月20日には、東京の国会近くの星陵会館におきまして、少人数学級の更なる推進など、教職員の定数改善計画等を進める全国集会を、子どもたちの豊かな育ちと学びを支援する教育関係団体23団体の連絡会で、国会議員の先生方も交えて行っております。

さて、東日本大震災発生以来1年8か月が経過いたしました。全連小といたしましては、昨年来、息の長い支援を続けることが重要であるとお話ししております。すでに今年度2度にわたり、岩手、福島、宮城3県の校長会と連絡会を行い、被災地の状況について把握してまいりました。全連小の総会においてもお願いしたところですが、今年度の義援金について、7月末に事務局を通して各県小学校長会に協力依頼をさせていただきました。被災県からは、全国の校長先生方に頼ってばかりはもういられない、自分たちの県で自立しようという声もあり、今年度限り1回3,000円をめどにお願いいたしました。各県の状況がそれぞれであることは承知しておりますが、できる範囲で、ご理解ご協力をお願いしたいと考えております。

結びになりましたが、坂野重法愛知県小中学校長会長、山内雅夫大会実行委員長はじめ各役員の皆様方、ご参会の東海・北陸地区の小学校長会の皆様のご尽力に感謝申し上げますとともに、ご参会の皆様のご健勝をお祈りして、お祝いの言葉とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。



講師紹介

東海・北陸地区連合小学校長会
愛知大会実行委員長

山内 雅夫

実行委員長の山内です。

愛知県は産業県、ものづくりが盛んであります。

愛知で開催される大会の記念講演の講師として、愛知県にゆかりのある、ものづくりにも造詣の深い方を、お迎えすることができました。

山根一眞先生です。(入場、拍手)

先生は、以前より週刊ポストに、「メタルカラーの時代」として、日本の最先端、最新の技術とそれに携わる人物を取材し、対談形式にまとめ、紹介していらっしゃいました。人々の工夫や努力をとて分かりやすくまとめておられ、よく読ませていただきました。

また、その手法は、NHKの名古屋放送局から「未来派宣言」という番組で、全国に発信され、映像を通してものづくりに携わる人々の工夫や努力を伝えてこられました。私は、この番組が、後の「プロジェクトX」などに発展してきていると思っています。

そして、2005年に愛知県で開催されました万国博覧会では、メインパビリオンの一つ、愛知県館の総合プロデューサーとして、先生のアイデアやご指導をいただくことができ、とても好評をいただきました。

また、小惑星探査機「はやぶさ」につきましては、開発された時からずっと取材を続けてこられ、それらの記録を「小惑星探査機 はやぶさの大冒険」として本にまとめられました。そして、その本の内容は、東映によって映画化されました。渡辺 謙さんの主演による「はやぶさ 遙かなる帰還」です。ご覧になった方もいらっしゃると思います。

今日は、「小惑星探査機 はやぶさの大教訓」という演題でご講演をしていただきます。

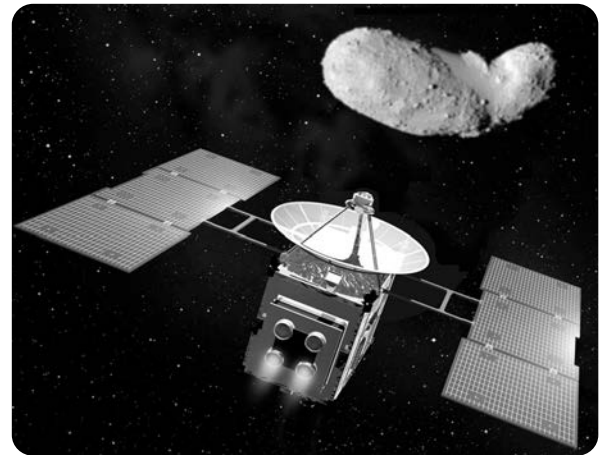
「ものづくり愛知」とはいえ、「ものづくりの始まりは人づくりから」です。人づくりを仕事にしている私たちは、先生のお話をとても楽しみにしていました。

それでは、山根一眞先生、よろしくお願ひします。(拍手)

記念講演

小惑星探査機「はやぶさ」の大教訓

ノンフィクション作家 山根一真氏
獨協大学経済学部特任教授



(講演記録より一部抜粋)

「はやぶさ」や「しんかい6500」などの仕事は、理工系の分野ですが、私は文化系出身です。でも文化系の間でもこうやって理工系の、科学技術の最先端のことを皆さんに伝えているわけです。こういうことを、今の子どもたちにも伝えたいんです。科学技術だから科学の専門家だけのものだ、ということではない。日本人としての誇り、困難への挑戦心、チームワークの重要性、リーダーシップのありようなど、そこにはあらゆる人々が多くのことを学び、感動する対象なんです。「理科離れ」と言われて久しいですが、ぜひ子どもたちが「理科」から離れない努力をしていただきたいと思うのです。

<詳細は、愛知大会報告書をご覧ください>





分科会報告

東海・北陸地区連合小学校長会 土井 正直
愛知大会研究部長

おはようございます。研究部長をしております、名古屋市立庄内小学校の土井と申します。よろしくお願いいたします。

東海・北陸7県の各小学校の校長先生方が、一堂に会する、一年に一度の機会である、この大会にご参会いただき、ありがとうございました。

発表者をはじめ、司会・記録・運営等ご担当くださった皆様、そして、積極的にお話し合くださったご参会の皆様、おかげさまで有意義な分科会になりました。ご尽力に対し、厚くお礼申し上げます。

今回の愛知大会では、「校長のリーダーシップ」をキーワードに、分科会ごとに研究協議を深めていただきました。

この場では、各分科会に共通する全体的なことがらを2点述べ、報告に代えさせていただきます。一つめは、有意義であったことです。

校長のリーダーシップの発揮のさせ方は、各分科会の教育課題によって、アプローチの仕方や内容は、異なると思いますが、研究協議を通して、「明日からの学校経営に生かしていこう！」と、意を新たにもたれた方も多いことと思います。

二つめは、大切な出会いであったことです。

研究協議やグループ協議で、参加者の互いの距離感が縮まってきてよかったという声を耳にして、うれしく感じました。こうした、7県の校長先生方との出会いを大切にしたいものです。

学校経営の責任者である校長のリーダーシップにより、これまで以上に創造性と指導性を発揮し、未来に向かって生きる子どもたちのために、新しい教育の改善を図っていくことが大切だと思います。

各分科会に参加された皆様には、研究協議での成果を各県へ持ち帰り、広げていただきたいと思います。

また、各分科会での研究協議の内容については、後日送付されます報告書をご覧ください。

以上で分科会の報告を終わります。ありがとうございました。

分科会



手筒花火(豊橋市)

第1分科会

学校経営

研究課題

生きる力を育成する創意ある学校経営

研究協議題

- (1) 学校の教育目標の具現化を図る学校経営の推進と校長のリーダーシップ
- (2) 学校組織マネジメントを生かした学校づくりと校長のリーダーシップ

1 基調提案

我が国は現在、政治・経済のみならず、様々な分野での急速な変化に伴う課題が次々に生まれ、先行きが不透明な状況にある。そんな中、昨年度より新学習指導要領が全面実施となり、未来において不易のものとしての「生きる力」の育成を目指してきたところである。

今後はさらに、校長のリーダーシップのもと今求められる「生きる力」の理念を的確に捉え、学校の教育目標の具現化を図り、各校の実態に即した特色ある実践活動を推進しなければならない。

また、学校組織マネジメントの考え方や手法を活用し、学校を取り巻く様々な環境に即応した特色ある学校づくりを行っていくべきと考える。

2 研究発表及び協議

(1) 生きる力を育てる創意と活力ある学校経営

＜岐阜県＞

(発表要旨)

教育は、信頼関係を基盤として成立する。岐阜市では、常に、開かれた学校を意識し、学校の説明責任を果たすこと、家庭や地域社会の声を真摯に受け止め、学校改善に努めることを大切にし、信頼を得る学校経営に努めている。家庭地域の教育力の低下が問題となっている今だからこそ、小中一貫の考えのもと、家庭・地域との強固な連携を図り、学校の力とする校長の指導性を発揮したいと考える。

①学校の自己評価や外部評価の生かし方

ア 評価項目を、学校改善に生かす取り組み

イ 小1プロブレムの改善を図った取り組み

②家庭や地域社会の理解と連携を図りながら進める学校経営

ア コミュニティの組織や活動を生かした学校

経営

イ 地域と学校とが双方向で理解と連携を図りながら行う学校経営

③開かれた学校づくりを目指した岐阜市型学校運営協議会による学校経営の進め方

ア 地域の歩みを生かした学校経営

イ コミュニティ・スクールのよさを生かした学校経営

(協議内容)

①学校サポーター制度にかかわって、その意義を周知理解させ地域行事への職員の参加が図れるように努める。

②小1プロブレムについては、生まれ月による仮編成もメリットはあるが、幼稚園・保育園等関係機関との情報交換を密にし、連携を深めることでプロブレムの解消が図れる。

③岐阜市型運営協議会については、人事権こそないが、学校教育がよりよくなるよう、校長は人選を慎重にし、開かれた学校づくりを進めている。

(2) 教職員の力を伸ばし、組織としての指導力を向上させる学校経営と校長のリーダーシップ

＜福井県＞

(発表要旨)

児童の生きる力を育成するために、学校は様々な取り組みを行っている。教員個々の指導力の向上もさることながら、教職員の力を結集し組織としての実践力を高めることが大切であると考える。校長として次の2つの実践から校長の学校経営の在り方について探った。

①生きる力につながるスクールプランの改善

ア 学校経営を具現化したもの

イ 前年度に成果が上がらなかったことに再挑戦

ウ 今為すべき学校の課題に徹底的に取り組む

エ 児童や教職員にやる気や期待感を持たせる

- ②同僚性を高める職場づくり
- ア 職員室の機能を高める
- イ 積極的な授業公開
- ウ ボトムアップの誘発

(協議内容)

- ①成果は1年2年では見られないが、取り組み内容が充実したものになっていくように、職員に方策を考えさせ校長の考えを加え再挑戦の活動を地域・保護者に公表する。
- ②校長の経営方針を具体的な場面で教職員に指導できるのは、教頭である。その教頭をいかに育てるか、話し合いやすし合わせの時間をしっかりと設ける必要がある。
- ③日頃から教員の授業や指導の様子をよく観察し具体的に褒める。
- ④学校からの情報発信の中に年間計画を示し、学校公開に努める。地域人材を取り込み積極的に活用する。
- ⑤福井型評価システムに則り、1つの項目を児童・保護者・教職員という3方向から評価し、成果指標・満足度指標・取り組み指標の一致を目指し改善を進める。

(3) 地域力を生かし、地域に根ざした組織的な学校運営の推進

＜愛知県＞

(発表要旨)

子どもたちの「生きる力」を支える「知・徳・体」をバランスよく育てていくことは、子どもたちが未来を切り開いていく上で必要不可欠な要素である。「自ら高めること」「社会に役立つこと」を基本とした「あいちの人間像」の実現のために、一宮市では、一宮市学校教育基本方針を定めた。

本校では、「未来を拓く子ども」の育成、教員の指導力と資質の向上、児童の健全な育成のために、学校、家庭、地域の3つの組織的な取り組みを基軸として、信頼される学校運営を目指している。

- ①学校独自のプラン実施計画作成とその取り組み
- ア 学校評価アンケート結果による現状把握と課題の検証
- イ 市全体と本校独自で取り組む重点的な事項と具体的な手立て
- ウ 1年ごとの段階的な目標値の設定
- ②学校運営協議会制度の推進

- ア 学校運営協議会における、学校教育プラン・教育目標や教育方針への理解と意見や助言
- イ 小中学校が連携した活動の推進、専門部会での協議

③連区の地域づくり協議会との連携

- ア 共同活動を行う地域づくり協議会への参加
- イ 地震災害時に向けての「安心安全」の確立への連携した取り組み

(協議内容)

- ①学校運営協議会では、小中合同の行事活動や学習マナーの具現化、生徒指導上の問題等について話題にする。校長として、地域に根差した学校経営を進めていることを示す場でもある。また、防災についても避難所開設も含めて地域と連携できるようにしていく。
- ②学校評価アンケートや推進プランの指標について、感覚的になったり数値だけが一人歩きしたりしないように、実態のチェックや教職員との話し合いを密にし、校長としてのリーダーシップを発揮する。
- ③学校運営協議会が、各種活動のチェック機能を果たし相互に安心感が保てる組織になるように、校長はマネジメントする。一方、職員への周知、保護者の理解、人選などの課題検討を含め、小中の校長同士の連絡を密にしつつ学校経営を進めていく。

3 まとめ

校長は、しっかりとした経営ビジョンを描き、地域の様々な人材・能力・組織を双方向で生かせるようにコミュニケーション能力を発揮し、信頼関係を築いていかなければならない。

創意ある学校経営のためには、自校の実態を的確に把握し、教育目標の実現に向かって、校内の組織の活性化、教職員の意識の改善や資質向上を図るように仕組んでいく必要がある。



第2分科会

教育課程

研究課題

確かな学力・豊かな心・健やかな体を養う教育課程

研究協議題

- (1) 確かな学力・豊かな心・健やかな体を養う教育課程の編成と校長のリーダーシップ
- (2) 学校の特色を大切にしたい教育課程の編成と校長のリーダーシップ

1 基調提案

教育課程の編成に当たっては、自校の教育課題を把握し、「生きる力」を育む学校経営方針を明確に打ち出し、学校の特色を大切にしたい創意工夫ある教育活動が展開できるよう、校長としてのリーダーシップを発揮することが重要である。

教育課程を編成する上で、「確かな学力・豊かな心・健やかな体」の三つの密接な関わりやバランスを明らかにし、学校教育全般の中で「生きる力」を育むためには、校長のリーダーシップをどのように発揮すればよいかを具体的に究明したい。

地域・児童・教職員の实態（人的環境）や地域や学校の施設・設備（物的環境）など、学校・家庭・地域がそれぞれの役割を果たしながら、それぞれの教育力を活用することが重要である。

学校の特色を大切にしたい教育課程を編成する上で、校長のリーダーシップをどのように発揮すればよいかを具体的に究明したい。

2 研究発表及び協議

- (1) 確かな学力を育て、特色ある学校づくりを行うための創意ある教育課程と校長の役割や指導性 〈富山県〉

（発表要旨）

- ①指導力向上と啓発活動から育む確かな学力
 - ア 学力向上拠点校の実践事例研究
 - ・学力向上のベースとなる人間関係づくり、基本的な生活習慣や家庭学習の定着（A校）
 - ・帯タイム、月曜チャレンジ、TTによる個別指導（B校）
 - イ 授業づくりサポート、家庭への啓発活動
 - ・「魚津っ子の学び向上委員会」の設置
 - ・リーフレット「魚津っ子に確かな学力を（教員向け）」「家庭学習のすすめ（家庭向け）」

- ・市内の学校や各種団体等への広報活動
- ②複合施設の利点を生かした特色ある学校づくり～幼保小連携～（C校）
 - ア 園児と児童の交流（交流活動プログラム）
 - イ 保育士と教員の連携（授業参観・行事参加）
 - ウ 子育て支援（子育て講座、保育園夏祭り）
- ③校長のリーダーシップについて

児童や学校の実態、家庭・地域の実態を反映した学校経営のビジョンを明確に提示する。幼保小連携を特色ある学校づくりの柱にすえ、長期にわたる児童の見取りとより細かな指導を推進する。

（協議内容）

- ①学力向上拠点校の取り組みを全体に伝え、各学校が生かしていくことで、教師の意識改革や授業力向上に役立っている。
- ②家庭学習の実態や家庭学習の方法を家庭に知らせることで、家庭の協力が得られた。自学自習では個に応じた指導が必要。
- ③幼保小の連携については、近隣の園・学校で交流が盛ん。離れている所では交流が困難。
- ④若い教師の割合が増えており、授業力や子どもとの人間関係づくりに課題。先輩教師による助言、弱点を補う研修、教師が子どもの遊びに入れる時間を確保する等で対処。
- ⑤特別な支援を要する児童への対応に苦慮。授業の補助に人的な配慮を要望する声強い。

- (2) 「縦の接続と横の連携」による特色ある教育課程の編成 〈静岡県〉

（発表要旨）

- ①縦の接続：子どもの発達や学びの連続性
 - ア 幼保小の円滑な接続のための連携・協力（A校）
 - ・教師間の交流（連絡会議、交流活動にて）
 - ・園児と児童の交流（入門期の指導計画）
 - イ 小・中接続を意識した相互乗り入れによる

- 一部教科担任制の導入（B校）
- ・組織の活性化（連絡会、研修会、部会）
- ・授業交流（小・中兼務教員の指導等）

②横の連携：学校・保護者との連携

ア 同一中学校区の小規模校3校連携による家庭学習の習慣化（C校）

- ・家庭教育支援冊子「家庭学習のススメ」
- ・「ノート検定7か条」の取り組み

イ 家庭との連携による子どもの学力を伸ばす家庭学習の充実（D校）

- ・家庭学習企画部の立ち上げ、「家庭学習のススメ」の作成、家庭学習を意識した授業

③校長のリーダーシップについて

明確なビジョンを描く中で、幼稚園・保育園や中学校、保護者への積極的な働き掛けや具体策を工夫し、教職員組織を生かした特色ある教育課程を編成する。

（協議内容）

- ①幼保小の連携は、近隣から交流をはじめている。関係の園と小学校で年間計画を立案。スタートカリキュラムに重点。小1プロブレムの解消が学力の向上につながる。
- ②小・中の連携では、関係各校の各セクションのトップが理解を深めることが大事。特に養護教諭。「義務教育9か年でどのように子どもを育てるのか」共通理解が必要。小学校の外国語活動に中学校の教師が兼務でTTに。
- ③課題からはじまり、その課題を解決していき、最後に新たな課題が生まれてくるように授業を展開すると、その課題を解決するために子どもたちは家庭で調べ学習をするようになる。

(3) 「特色ある学校づくり推進事業」を生かした教育課程と校長の役割

～地域の自然と「おしろやま班活動」で子どもたちを育てる取り組み～

＜愛知県＞

（発表要旨）

- ①「特色ある学校づくり推進事業」（市の予算措置）を受け、自然豊かな環境を有効利用することを柱とした教育課程を編成（A校）

ア おしろやま班活動

- ・全校縦割り異年齢集団による班活動。「1年生を迎える会」「おしろやま遠足」「おしろやま班対抗ドッジボール大会、長縄大会」「おしろやま掃除」等

イ 地域（人材）を生かした活動

- ・「学校林」1年生と6年生のペアでの遊び
- ・「米づくり」「餅つき」「感謝の会」
- ・「学びとふれあい子ども教室」音羽川体験、音羽川清掃活動、アカザ(魚)の調査・飼育

②校長のリーダーシップについて

特色を生かした活動を続けるが、マンネリズムに陥らないように。地域人材への働き掛けを積極的に行うとともに、保護者や地域への「学校評価」を実施し、それに基づいた見直しをする。

（協議内容）

- ①全校縦割り異年齢集団による班活動を通して絆が強まる。仲間を大切にする心、小さな子を大切にする心が育つ。
- ②活動時間の保障が難しい。活動内容によって、長い休み時間で行う工夫をしている。ねらいや系統性を意識し計画的に進められるよう、事前に職員に伝えるようにしている。
- ③地域のボランティアや各種グループ、企業の方々などから、水田や林での活動への支援、ペンキ塗りや草刈りなどの協力をいただけている。学校の情報を伝えたり、地域の情報を受けとったりする機会にもなっている。

3 まとめ

確かな学力・豊かな心・健やかな体を養うには、その基盤となる安定した学校生活を実現することが必要である。また、基本的な生活習慣の確立や家庭学習の定着は欠かせないものである。

学校の特色を大切にしている活動に、計画的に系統立てて取り組んでいくことである。

校長は、児童や学校の実態、家庭や地域の実態、県や市町村の方針や事業を勘案して、学校経営のビジョンを明確に提示する必要がある。地域とのコーディネートを読み取っていく存在でありたい。



第③分科会

現職教育

研究課題

時代や社会の変化に対応でき、豊かな人間性と専門性を高める現職教育

研究協議題

- (1) 教職員の資質・能力を高める研修の推進と校長のリーダーシップ
- (2) 校内における研究・研修の活性化を促す組織づくりと校長のリーダーシップ

1 基調提案

社会が加速的に変化している時代、知・徳・体のバランスのとれた児童の育成が重要な課題となっている。しかし、学校の現状は教職員の世代交代が進み、経験不足による指導力の低下が懸念されている。もとより、学校教育は家庭や地域との連携・信頼のもと成り立っており、学校教育に寄せられる期待は大きい。その期待に応え、信頼される学校であるためには、教職員一人一人の意識改革や一層の指導力向上が求められている。

そこで、「現職教育」の分科会では、「校長のリーダーシップ」をキーワードに、2つの研究協議題「教職員の資質・能力を高める研修の推進と校長のリーダーシップ」と「校内における研究・研修の活性化を促す組織づくりと校長のリーダーシップ」について究明したい。

2 研究発表及び協議

- (1) 「しなければならない」から「やりたい」へ～活気のある実践と人材育成～ <三重県>
(発表要旨)

「生きる力」を育むために「しなくてはならないこと」から「やりたいこと」を実践していくことにより、学校経営に活気生まれる。教職員の「やりたいこと」を意義づけたり、関連づけしたりしながら体系化し研究を進めた。

①語り合う研修

- ア 校務分掌における委員会や部の充実
- イ 全体会におけるワークショップの導入

②中堅・若手リーダーの育成

中堅・若手教職員の配置と助言・補助体制

③自主性の尊重

若手教職員と経験のある教職員の組み合わせによる自主的な実践

(協議内容)

- ①校長は、教職員の「やりたいこと」の現状や内容を十分把握し、学校経営方針や市・県の方針に沿った実践であるかどうかを確認し、必要に応じた指導・助言をする必要がある。
- ②教職員の「やりたいこと」をやり遂げさせるためには、校長の覚悟と責任が求められ、校長が幅広いネットワークをもち、人材や情報収集を行い、助言できるようにしておく必要がある。

- (2) 羽咋教育ビジョンを基盤とした教職員の研修体制づくりと人材育成 <石川県>
(発表要旨)

羽咋教育ビジョンを基盤として、校長会と市教委が研修の企画・運営で連携し、研修体制づくりと指導の在り方について研究を進めた。

①教職員の育成（校内研修）

- ア 授業研究会、訪問要請
 - イ 指導の共有化
 - ウ スキルアップマイプランの実施
- ②ライフステージに合わせた力量形成
- ア 若手教師ゼミ（経験2年目まで）
 - イ 中堅教師研修（35～45歳）
 - ウ ミドルリーダー研修（46～52歳推薦者）

③校長としてのかかわり

- ア 効果的な研修の企画・運営
- イ 研修会講師に対する指導・助言の在り方
- ウ 次期管理職候補への意識化、意欲化
- エ 面談による意欲と実践の質的向上

(協議内容)

- ①市教委との連携で、組織的、効果的な研修体制づくりが進んでいる。ライフステージに合わせた研修内容が用意され、学校ごとの格差をなくしている。
- ②研修が自主研修という形態となり、勤務時間外の研修になることがある。研修の効果と共

に教員の負担感について、考えていく必要がある。

- ③ミドルリーダー研修では、参加者の学校経営への参画意識が高まり、資質・能力の育成に効果が上がっている。研修からもれる者のモチベーションの維持と得意分野での生かし方について考える必要がある。

(3) 参画意識を高め、資質・能力の向上を図る研修の推進と校長のリーダーシップ

＜愛知県＞

(発表要旨)

学校の課題を努力目標とし、教職員が共通理解を図り、同じ目標に向けた取り組みを進めることにより、教職員の参画意識を高めると共に資質・能力の向上につながる。

努力目標に関わる研修と校長のリーダーシップについて、努力目標と参画意識の高揚、努力目標に関わる研修と資質・能力の向上の2点から研究を進めた。

- ①努力目標実践の内容と方法
- ②参画意識を高める取り組み
 - ア 努力目標の設定と共通理解
 - イ 努力目標の地域・家庭への説明
 - ウ 努力目標の成果と学校評価
 - エ 努力目標と教職員評価
- ③努力目標に関わる研修と資質・能力の向上
 - ア 校内研修に活用した例
 - イ 研修場面と教職員の資質・能力の向上
 - ウ 今後、実施したい研修例

(協議内容)

- ①参画意識を高める取り組みの工夫
 - ア 問題解決の方法をファシリテーション方式により意見を引き出し、キーワードをまとめていくことにより、議論を深めている。
 - イ 努力目標の設定や取り組み、その成果を学校だよりやホームページ等で知らせる。児童の成長と教職員の努力をこれらでアピールすることにより、保護者や地域の信頼を得ることにつなげている。
- ②研修で資質・能力を高める取り組み

努力点の授業で模擬授業を行うことにより、若手教員が児童の立場から授業を考え、中堅教員が積極的に意見を述べることで、授業力が向上している。

3 まとめ

教職員の資質・能力が向上し、学校の組織としての教育力が発揮されることが、家庭や地域からの信頼に結び付く。本分科会では、「資質・能力の向上を図る研修の進め方」「教職員の意識改革」「協力して研修を進める体制づくり」などの点から、研究協議やグループ協議において校長がどのようにリーダーシップを発揮していくか、協議を深めた。

(1) 研究協議題1について

一人一人の資質・能力を向上させる研修では、教職員の「やりたい」という想いや自主性が尊重される活気ある実践が必要であり、校長は学校経営や市や県等との方針と結び付け、子どもの成長から実践を検証し、指導・助言する必要がある。

また、校長会として市教委と連携し、教職員に負担を与えない、組織的で継続した体制づくりに取り組むことが、効果的な研修を進める上で大切なことである。

(2) 研究協議題2について

学校の課題に応じた目標に向け、教職員が共通理解を図り、目標達成に関わる研修に取り組むことで、教職員一人一人の教育的力量が向上する。

また、協働する喜びを通して、学校運営に対する参画意識も高まる。校長は、参画意識の高揚と結び付く効果的な研修方法や研修内容を工夫する必要がある。



第4分科会

道徳教育

研究課題

人間として善悪を判断し、よりよく生きる心を育む道徳教育

研究協議題

- (1) 人間として必要な道徳性や規範意識を養い、実践的な態度を育てる道徳教育と校長のリーダーシップ
- (2) 家庭・地域社会が一体となって、豊かな心を育てる道徳教育の推進と校長のリーダーシップ

1 基調提案

物質的価値が重視され、努力することが軽視される現代社会の風潮は、社会の規範意識を低下させ児童のよりよく生きようとする力を弱めている。こうした中、道徳教育は児童の善悪の判断に基づく行動形成を促し、個々の願いの実現を目指してよりよく生きようとする心を育むことが課題となる。

そこで、教育活動全体における道徳教育と要としての道徳の時間の在り方を追求し、家庭・地域社会と一体になって道徳教育を推進していくために校長が発揮すべきリーダーシップについて考えていきたい。

2 研究発表及び協議

(1) 体験を生かし、道徳的価値の自覚を深める道徳の授業及び評価と校長の指導性

＜岐阜県＞

(発表要旨)

平成20～25年に「地域ぐるみの道徳推進計画」を策定した。校長会では研究協議題を踏まえながら、「道徳の時間」と「他の教育活動との関連」において校長の指導性を追求してきた。

①道徳の時間

県道研の主題構成表をもとに自校の実践を加味して自校版の指導構成表を作成した。また、毎学期行う道徳性調査や授業後のアンケート、追跡評価等によって児童個々の実態把握に努め、それを考慮した上で内容項目の補充・深化・統合を意識した指導を行った。

②特別活動

「道徳の時間と他の教育活動との関連表」を活用し、特に学級活動や集会活動を通して道徳の時間のねらいとする価値が生かされるように努めた。

③家庭・地域連携

学校生活だけではなく、家庭・地域社会に目を向け、行事等を通して関わっている。また、今年度は小学校区の保育園、幼稚園において「道徳性の芽生えを育む発達過程表」を作成するなど、幼保と小の成長の接続を視野に入れた交流に努めている。

(協議内容)

- ①関連表は有効であり、単発的な行事のためだけでなく長期間にわたって利用できるが、毎回作成していくのは大変である。
- ②道徳の時間を核として他教科や地域活動等につなげていくことはすばらしい。年間35時間の道徳の授業だけで道徳の実践力を養うのは社会の変化が著しい現代では困難である。
- ③中学校区で小中の道徳の授業公開が交互に保護者や地域を巻き込んで行われていることや園長を兼務する校長を中心として小と幼保の交流が進められていることはすばらしい。

(2) 「心の教育」の充実を図るための、「道徳の時間」を要とした実践的な態度を育む道徳教育の在り方

＜福井県＞

(発表要旨)

教育環境が変化する中、「心の教育」の充実を図り、子どもたちの規範意識の育成や命を大切にする心を身に付けさせることは喫緊の課題である。その解決の中核となる道徳教育の推進における校長の指導性について研究を進めた。

①アンケートの実施と考察

スクールプランの内容等に関するアンケートの結果、各校とも「心の教育」の充実が重点目標となっていたものの、単元的な道徳学習の推進や道徳教育推進教師の役割等に関する課題が確認された。

②小学校の実践事例と体験的な活動

各校で地域教材の開発や特別活動と関連さ

せた道徳教育が進められている。また、越前市「夢先生」授業、米の収穫体験など、心を育てる体験的な活動が実施されている。

③道徳教育における校長の指導性

現状と課題を踏まえ、教職員評価も活用しながら校長として教職員の意識を高め、学校全体で道徳教育に取り組みたい。また、情報を発信し、保護者・地域の支援を得ながら協働して道徳教育の推進にあたりたい。

(協議内容)

- ①総合単元的な道徳学習はエネルギーが必要である。道徳教育推進教師の助言やネットワークを通して得た他校の事例を参考にして計画を立てるとよい。
- ②地域・学校協議会より、各校の課題が提案されるが人事権は学校にはない。一般の意見はホームページで得るとよい。保護者の規範意識を高めるために校長自ら執筆した「学校だより」を配布していることはすばらしい。
- ③自分の気持ちをうまく表現できない子どもが増えているので、具体的に何を実践していくか明確にし、まずは教師が意識して取り組みたい。

(3) 家庭・地域社会とともに子どもの心を育てる道徳教育の推進と校長としての関わり

＜愛知県＞

(発表要旨)

道徳教育は喫緊の教育課題であり、校長として「関わりを意識した教育活動の推進」「家庭・地域社会との連携を深め、積極的な理解や支援を得る教育活動の推進」の二つの視点を大切にしながら取り組んできた。

①心を育てる場としての教育活動

年度当初、経営方針として、地域連携の必要性も含む関わりの方の重視について教職員に説明した。現職研修では市のスーパーバイザー事業を活用し、言語活動における児童同士の関わりに注目し、話し合い活動の研修に取り組んだ。また、様々な体験の機会が少なくなっていることから体験的な教育活動を重視し、あいさつ運動や米作り体験、更に、東日本大震災の復興支援をきっかけに始まった「旭小向上プロジェクト」などで様々な道徳的価値に気付かせ、豊かな心を育てることができた。

②家庭・地域社会を意識した教育活動の推進

「打ち囃子」や「ざい踊り」など、地域の伝統や文化を教育活動に取り入れ、生活と結びつけることで道徳活動の広がりを期待した。また、学校公開日に道徳の授業を一斉公開し、保護者に感想を書いてもらうことなども視野に入れながら、保護者が児童と共に道徳的価値について考える場を設定した。日常的には、学校だよりやホームページ等で共通理解を図っている。

(協議内容)

- ①市の予算によるスーパーバイザー事業で専門家や大学教授などに言語活動や道徳教育そのものについて年に数回アドバイスをいただいているのはすばらしい。他県にも同じような例はあるが、より多くの県や市で今後予算化されることが望まれる。
- ②多くの小学校（出席者の半数以上）が道徳の授業のみの授業公開日を設けている。しかし、ねらいなどの資料を配布したり、保護者との話し合いの時間を設定したりしている学校はほとんどなく、今後の課題と言える。

3 まとめ

道徳教育については、年度初めに校長が基本方針を明確に示し、個々の児童の実態把握や校内研修の方向性も念頭において、計画的に進めることが肝要である。学校としては、道徳教育推進教師を中心に、道徳教育の要である「道徳の時間」の在り方や指導方法の工夫について考えると共に、特別活動や他教科との関連から総合単元的な道徳学習を年に数回は実施するための構想を練ることも必要になってくる。

今後、授業のねらいや道徳的価値について保護者や地域社会に知らせたり、話し合いの場を設定したりしていくことが重要になってくると思われる。



第5分科会

生徒指導

研究課題

心身共にたくましく生きる児童の育成と豊かな人間関係を育てる生徒指導

研究協議題

- (1) 一人一人の自己肯定感を高める生徒指導と校長のリーダーシップ
- (2) 家庭・地域社会・関係各機関等との連携による生徒指導と校長のリーダーシップ

1 基調提案

少子高齢化やグローバル化、高度情報化などが進展する中で、いじめ、不登校、非行など、児童の問題行動の背景には、規範意識や家庭・地域社会の教育力の低下が関係していると指摘されている。

こうした状況を踏まえ、学校教育においては、一人一人の確かな児童理解を基に、児童相互の信頼関係を深めると共に、自己肯定感を高める指導を通して、自己指導能力を育てていくことが望まれている。その上で、自他の個性を尊重し、互いの良さを見付け、互いの身になって考え、協力し合う、望ましい人間関係を育てることが大切である。

また、児童の直接的な社会体験や自然体験が減少し、親や教員以外の大人や異学年の児童との交流する機会が不足するなど、人間的なつながりが希薄になってきている。こうしたことから、多くの大人がこれまで以上に児童の成長に関わり、家庭や地域社会における体験活動を広げ、より連携を深めながら、豊かな心を育てていくことが必要である。

そこで、学校の全教育活動を通じた積極的な生徒指導及び家庭・地域社会・関係各機関等との連携による生徒指導について、校長としてのリーダーシップを明らかにしていきたい。

2 研究発表及び協議

(1) 自己指導能力と豊かな人間性を育てる生徒指導と校長のリーダーシップ <富山県> (発表要旨)

自己肯定感を高め、自己指導能力を育てるために、2校の実践が紹介された。

ユニバーサルデザインを取り入れた学校では、校長の経営方針に「どの子にも優しい学級づく

り」を掲げ、保護者と共同で落ち着いた教室環境を作った。また、ユニバーサルデザインを取り入れた授業作りや特別支援教育の校内研修の充実、特別支援学校や高齢者との積極的な交流等を実践する中で、落ち着いて授業が受けられる子どもの増加や保護者・地域の協力者の増加など、子どもにも保護者にもそして地域にも優しい学校になってきていると実感している。

生きる力に満ちた心身共に「きととき」な子どもの育成に努めた学校では、校長の経営方針に「豊かな体験や関わりが自己肯定感につながる」を明示し、子どもの実態に基づいたPDCAサイクルを大切にした教育活動の工夫・充実を図るよう指導するとともに、年度当初の経営方針説明や、各種会合への参加、学校便りやホームページの充実等を通して、家庭や地域の理解や協力を得て教育の充実を図る体制を率先して整えた。また、諸課題に柔軟に対応できる教師の資質・能力の向上を図る研修や校長の働きかけも工夫し、教職員も温かな関係で動きがよくなったとの報告があった。

(協議内容)

- ①ユニバーサルデザインの発想を教室環境に取り入れることにより、教職員の意識が変わり、子どもたちも落ち着いた学校生活を送れるようになることを考える。
- ②教職員や子どもたちが、小さな気付きや情報を共有することにより、互いに認め合い、生き生きと活動する子どもたちが育つ。そのために、系統的・計画的な教育活動の構築への校長のリーダーシップを発揮すべきである。

(2) 積極的な生徒指導の基盤としての温かな人間関係づくりの推進 ～島田市校長会の共通実践～ <静岡県> (発表要旨)

島田市校長会では、問題行動や不登校などは

「人間関係が上手につくれないこと」に一因があると捉え、静岡県による「人間関係づくりプログラム（以下『人関プロ』）」の実践を次の2つの視点をもって市内全校で進めている。

- ①人関プロを活用したモデル校での実践をもとに市内小中学校へ波及させる。
- ②各校の実態に即した人関プロを活用し、より良い人間関係づくりを推進する。

校長自らが、「人関プロを通して、児童生徒の人間関係の基盤を構築した上で各活動を進めていけば、児童生徒は相互の良さを認め合い自己肯定感を高めていく」という経営方針・姿勢を示し、教職員の生徒指導に関する意識を高め、指導の動機付けをしている。

また、教育課程への位置付け、教職員研修による内容と方法などの理解、成果の把握と指導へのフィードバックなども、人関プロを推進していく上で有効な働きかけである。

これらは、児童生徒の人間関係に関するスキルを高め、市内教職員の児童理解や人間関係構築についての意識を高めることにも効果が見られ、いじめの減少につながっていると報告があった。

（協議内容）

- ①人関プロを取り入れることで、教職員の意識が変わり、子どもの見方、指導のあり方も変わる。
- ②人関プロを日常生活にいかんにか生かしていくか、そしてその上で自己肯定感を一層高めていくことが課題となる。また、教師自身のソーシャルスキルを高め、人材を育てていく取り組みも必要である。

（3）「岡崎の心」の醸成と心を育てる生徒指導と校長のリーダーシップ <愛知県> （発表要旨）

岡崎市では、自分のみでなく他者を思う心を育成していくことが大切であると考え、「岡崎の心」の醸成、子どもの心を耕す活動、親の力を生かす活動に、市内各校が取り組んでいる。

岡崎市の教育の三本柱の一つに「岡崎の心」の醸成を打ち出し、各教科・領域・岡崎の自然、歴史、伝統芸能、偉人、産業、先人の知恵などを学ぶカリキュラムを独自に作成している。例えば、「おかざきの心の歌（夢三部作）」の作成、岡崎の偉人の業績や文化の教材化などが紹介さ

れた。また、子どもたちの心を耕す活動として、保護者や地域の人も参加する「いじめを考える人権集会」の開催、「岡崎市いのちの教育アクションプラン」の推進、「いのちの教育学習指導案事例集」の作成などが行われている。親の力を生かす取り組みとして、関係保護者のネットワーク作り、親子で楽しむ学校行事の創造などが具体的に紹介され、計画的で継続的な実践が報告された。

（協議内容）

- ①郷土を愛する心が、児童生徒の生きる拠り所となる。この心の土台作りが自己肯定感につながっていくと考える。
- ②保護者の協力をいかに得て活用するかは、校長のリーダーシップにつながる。そのために、保護者が参加できる行事を企画していくことが必要であると考えられる。

3 まとめ

各県の発表から特徴的なことは、市校長会が積極的な生徒指導のねらいを明確に示し、校長自らが率先して研修を重ねていることである。そして、生徒指導主任者会等の各組織を活用して、各校の核となるサブリーダーを育てる研修体制を整えたり、郷土の偉人の業績や文化を教材化したりして、市全体で積極的な生徒指導への教職員の意識を変える取り組みが展開されている。また、各学校においても、校長が児童生徒の実態に基づいた経営方針を明確に示し、生徒指導の意義や関係性、効果などを積極的に明らかにし、教職員の先頭に立って学びの場を広げていると共に、家庭や地域を巻き込んだ取り組みが大切である。



第6分科会

健康・安全教育

研究課題

生命を大切にし、健やかでたくましい心と体を育む健康・安全教育

研究協議題

- (1) 自他の生命を大切にす健康・安全教育の推進と校長のリーダーシップ
- (2) 自らの健康の保持増進と体力向上を育む生活習慣化の推進と校長のリーダーシップ

1 基調提案

子どもたちを取り巻く状況は、厳しい経済状況に伴う社会の激変、大きな自然災害の影響や可能性などにより健康で安全な生活を営む上で課題が山積している。この社会環境の中で増加する不登校、問題行動、生活習慣病の低年齢化は、学校だけでなく社会全体の問題になってきている。

このようなことから校長は、学校における食育、体力の向上、安全及び心身の健康の保持増進に関する指導を通して、家庭や地域との連携を図りながら、健康・安全で活力ある生活を送る基礎が培われる学校を創造していかなくてはならない。

そこで、子ども、家庭や地域の実態を十分にとらえ、生涯にわたって生命を大切にし、健やかでたくましい心と体を育む健康・安全教育を推進するため、校長は学校の教育活動全体を通して、指導力を発揮していくことが大切である。

2 研究発表及び協議

- (1) 大地震・大津波・大水害等を念頭に置いた各校の危機管理体制の交流と校長の指導性

<三重県>

(発表要旨)

三重県においては昨年末、M9.0の三巨大地震連動を想定した各地の詳細な津波予測が発表されている。第1波が最短4分、最高波19mが11～13分に到達し、浸水予測地域も従来より内陸部へ大幅に拡大している。

各校では三巨大地震の連動発生を想定した防災教育、避難訓練、施設設備の点検、行政・保護者・地域との連携等の整備が喫緊の重要課題となっている。

防災教育・防災体制整備を危機管理の柱とし

て、いざという時に自ら判断して行動できる児童の育成、組織的に行動できる職員体制、備えとしての施設・設備整備を進めていかなければならない。

(協議内容)

- ①防災教育の充実・防災ノートの活用
具体的な視点・本気・繰り返しによる深化、家庭との連携
- ②避難訓練の見直し・多様な条件・反復
いつでも、どこでも、自分で命を守る・一人一人各自で避難するのが原則
- ③万が一への事前対応・柔軟に対応できる力
避難場所経路の確認、設定・緊急連絡体制の充実（メール配信）
- ④施設面の整備・設置者との連携
校舎の耐震化・より高いところ（屋上）への避難（改修）・避難経路の確保（橋の補強）
- ⑤設備面の整備
窓ガラスの飛散防止・棚の転倒防止・落下物等の点検
- ⑥身を守る意識
上靴の着用・防災頭巾・避難経路の確認

- (2) 保護者・地域・関係機関と連携して取り組む「健康の保持増進と体力向上」の実践と校長のリーダーシップについて

<石川県>

(発表要旨)

加賀市でも全国的な傾向にある「運動している児童としない児童の二極化」が進んでいることや朝ごはんを食べないなど、食生活や生活リズムの乱れている児童が増えてきている。

そこで、以下の点について調査・研究し、校長のリーダーシップの在り方について深めたい。

- ①児童の健康保持、体力向上について、保護者・地域・関係機関と連携して取り組む各学校の教育活動について調査する。

- ②調査の結果から、地域に根ざした特色のある取り組みをもとに、校長の関わりやリーダーシップの在り方について検討する。

(協議内容)

- ①PTA活動と関連した活動
 ②地域・町づくり推進協議会等と関連した活動
 ③校長の関わり
 ア 学校経営ビジョンや教育課程への位置づけを明確にして取り組む。
 イ 地域や町づくり、各種団体への協力要請とその交渉の橋渡しを行う。
 ウ PTA活動と関連した取り組みや保護者への協力依頼など、校長としてその方向性を明確にするとともにその必要性を示す。
 エ 学校だよりやホームページでの広報活動を推進し、活動内容を保護者や地域に知らせる。
 オ 全校集会での講話の機会を利用して活動内容を紹介し、体力向上・健康の大切さなどについて児童の興味・関心を高める。
 カ 主任層など担当者に対し、アイデアの提供、励ましや指導・助言を行う。

(3) 自ら運動に親しむ児童の育成と校長のリーダーシップ

＜愛知県＞

(発表要旨)

誰もが生涯にわたって、健康・安全な生活を営むうえにおいて、健康の保持増進と体力向上に向け、運動することの楽しさを味わわせることにより、自ら運動に親しむ児童を育成することは極めて重要であり、今日的な課題である。

そこで、名古屋市内調査協力校の5年生や校長に、運動に対する意識や運動に親しむ取り組みなどを調査し、課題を明確にした。

- ①名古屋市内調査協力校の5年生404人の児童を対象に、運動に対する意識や取り組みに関して、アンケートで現状を把握・分析し、課題を明確にする。

- ア 体育の授業に関する意識調査
 イ 休み時間に関する意識調査
 ウ 授業後や休みの日に関する意識調査
 ②名古屋市内調査協力校23校の校長に、運動に親しむ取り組みや課題などを調査する。
 ア 日常生活における運動・運動遊びの現状
 イ 運動経験を増やす学校の活動例
 ウ 校長としての役割

(協議内容)

- ①児童に体育の授業は楽しいと思わせるためには、指導形態の工夫が不可欠である。そのため、授業に関する現職教育の実施や実技研修に参加することが大切である。
 ②週間課程の工夫により長い休み時間を確保したり、運動集会活動の頻度を高めたりするなど、取り組みの充実を図ることが大切である。
 ③家庭・地域への啓発は、健康の保持増進や体力向上の重要性、学校での取り組みを学校便りやホームページなどの様々な機会を通して発信することが大切である。

3 まとめ

健康・安全教育を推進していくためには、次のような点で、校長の指導力を具体的に発揮することが必要であることが確認された。

- (1)防災安全教育は、現体制の見直しと万が一に備えた安全対策の継続が大切である。中でも、各学校が地域に応じた取り組みの充実を図り、家庭や地域との連携が重要となる。
 (2)児童の健康保持・体力の向上は、保護者・地域・関係機関と連携して取り組むことが大切である。特に、地域に根ざした特色のある取り組みをもとに、校長の関わりやリーダーシップを発揮していくことが重要である。
 (3)健康の保持増進や体力向上に向けて、二極化解消のために、体育の授業の工夫や全校体制の取り組み等を校長がどう仕組み、児童が自然に身体を動かすことができる時間や場をどう作っていくかが大切である。



第7分科会

人権教育

研究課題

人権感覚を高め、自他を尊重し、共に生きる力を育む人権教育

研究協議課題

- (1) 差別や偏見をなくし、互いに尊重し合い、共に生きる力を育む人権教育と校長のリーダーシップ
- (2) 教職員の人権感覚を高める研修の在り方と校長のリーダーシップ

1 基調提案

私たちの身のまわりには、未だに様々な偏見や差別が残っており、人権課題が依然として存在している。さらに、複雑化・多様化する社会状況の中、新たな人権侵害も発生していて、人権教育の推進がさらに必要になっている。私たち校長には、学校と家庭・地域社会が連携して、差別や偏見を許さない教育活動を展開していくことが求められている。

そこで第7分科会では「人権教育」を学校づくりに生かしていくために、校長が果たすべき役割と指導性をどのように発揮したらよいかについて、活発な研究協議を深めたい。

2 研究発表及び協議

(1) 自ら学ぶ意欲と確かな学力を身につけ、人権尊重を基盤とした子どもの育成

＜三重県＞

(発表要旨)

人権教育をすべての教育活動の基盤にすえ、場面ごとに子どもの姿を追いながら具体的な態度や行動に現れた児童の変容に基づき、研究を進めた。

- ①国・三重県・志摩市の指針
- ②学校の経営方針
- ③学校の中での取り組みから
 - ア 地域のお年寄り訪問活動
 - イ 戦争体験の聞き取り
 - ウ 仲間づくりの取り組み
 - エ 出会い学習
 - オ 関係機関との連携
 - カ 人権感覚あふれる学校づくり支援事業
地域のお年寄り訪問活動・戦争体験の聞き取り・出会い学習など、地域に密着した取り組みの中から、子どもたちは人権感覚を高め

ている。また、関係機関との連携し教師の活動を積極的に支援し、教師がやる気をもって働ける職場作りに成果をあげている。

(協議内容)

- ①市内6年生全員が人権作文を書き、人権フォーラムを開催し、優秀作品を市内6年生全員を集めた場で発表をしている。市全体での人権教育の取り組みが成果をあげている。
- ②小規模校であるため、児童の人間関係が固定化しがちであり、教師と児童の関わりが強すぎる場面もあり、地域の人材を広く活用して多様な体験をさせることによって、人権教育に生かしている。
- ③子どもの本音を聞き取ろう、子どもと感性を共有しようとする教師の姿を看取り、教師の小さな成長を認め、教師自身の人権マインドの育成を校長がマネジメントしていくことが大切である。

(2) 互いに尊重し合う心を育む学校づくり

＜福井県＞

(発表要旨)

「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」を理解するにとどまらず、態度や行動に現れることを求め、「自尊感情を培う」「他者を尊重する心情を養う」ことに視点をあて研究を進めた。

- ①心を育む
 - ア 「ふれあい週間」の実施
 - イ 低中高での2学年活動や教科の持ち合い
 - ウ カウンセラーの活用
 - エ 相談体制の位置づけ
- ②差別を学ぶ授業研修
- ③つながる（共生）を育てる
- ④校長の関わり

小規模校としての問題点を把握し、解決に向け校長としてのリーダーシップを発揮した。

2回目の面談では、児童がどの職員とでもでき、学校全職員で児童を育てている。また、アンケート結果はファイルとして綴られ、経年変化を把握するのに役立っている。低中高での2学年活動や教科の持ち合いを行い、複数の職員が児童に関われる場を設定し、効果をあげている。

(協議内容)

- ①教職員との連携の中で地域の力を借りて、子どもを支え育むことができる。これは、どんな時でも人権教育の基本となる考えである。
- ②児童に自尊感情を高め、達成感をもたせるために、校長が「近くでみる」ことを大切にしている。校長がアンテナを高くし、小さなことでも子どもと関わりをもち、声をかけていくことが大切である。
- ③校長として、職員を巻き込んでいく時、配慮していることは、「言わなければいけない点は、はっきり言う。言ったことは一緒になって考える、お互いに努力する」ということである。

(3) 認め合い、心地よい人間関係を築くことができる子どもの育成

<愛知県>

(発表要旨)

市全体で人権教育研究として活動を発展させ、継続している。人の痛みがわかる豊かな感性をもつ児童、具体的な態度や行動がとれる児童の育成について研究を進めてきた。

- ①「人権タイム」の実施
- ②児童の実態の把握と支援
 - ア Q-Uを実施(年2回)
 - イ ソーシャルスキル(SST)
 - ウ グループエンカウンター(SGE)
- ③触れ合う場づくりの工夫
- ④人権学習年間計画に基づく授業の実践

「人権タイム」の計画を工夫し全校一斉の内容と学級の実態に合わせたソーシャルスキルの両方に取り組んだ。Q-Uを活用し、対人関係によるルール定着状況を把握することができた。専門家を講師に招き、分析の結果を具体的にどのように学級経営に生かしたらよいかを学び、大きな成果が得られたことが検証できた。また、異学年交流活動を年間を通して継続して行うことで、ペア学年同士の触れ合いが深まり、理解し合える場となった。

(協議内容)

- ①校長として、Q-Uを使い学級状況を把握したものを、改善の方策にどう導くかが大切なところである。客観的なデータとしてつかめ、経験の少ない職員には把握がしやすいので、例をあげながら有効性をアピールし、専門家と相談し方策を教わる橋渡しをすることが必要である。
- ②人権教育年間計画は、過去のものを毎年内容を見直し改善している。「人権タイム」など職員が一致していないと効果が薄いので、職員の意識を高めていく必要がある。
- ③校長は、地域の歴史的な状況の変化、地域住民の意識の変化を、転任職員に説明し、共通理解を図ることが大切である。

3 まとめ

第1の発表では、人権教育を基盤とした学校教育全体の中で、子どもの態度・行動を看取り、その場に応じた適切な校長としての関わり方についての実践研究であった。第2の発表では、課題に向けて校長のリーダーシップのもと、組織として改善を図っていく方策や一人一人の子どもの心にそった対応が示された実践研究であった。第3の発表では、個と集団の両面から学級経営をすすめ、人間関係づくりの改善を目指した実践研究であった。

その後、グループ討議では、教職員を育て児童を指導し、保護者や地域・行政と連携し理解を得るためには、校長の役割は極めて大きいこと、校長が情熱をもって取り組む姿勢こそが、特に大切であると確認し合った。



第8分科会

国際理解教育

研究課題

自他の伝統と文化に親しみ、豊かな国際感覚を育む国際理解教育

研究協議題

- (1) 日本や外国の伝統と文化に親しみ、国際理解を深める外国語活動と校長のリーダーシップ
- (2) 外国語活動を通して、豊かな国際感覚を育む国際理解教育と校長のリーダーシップ

1 基調提案

国際化や情報化が急速に拡大・進展し、国際社会で活躍できる日本人としての資質や能力を育成していくことが求められている。

そのためには、日本や外国の伝統や文化を理解することを通して、異なる文化をもつ人々と関わり合うことができる力を育成していく必要がある。

現在、学校や地域の特色を生かした、日本や外国の伝統や文化などに慣れ親しむ体験活動や外国語に慣れ親しむ活動が意欲的に実践されている。このような取組を今後も大切にしながら自他の伝統や文化を理解し、豊かな国際感覚を育む国際理解教育の一層の充実・発展を図ることと、そのための校長としてのリーダーシップの発揮について具体的に究明したい。

2 研究発表及び協議

(1) 地域や学校の特色を生かして、豊かな国際感覚を育む国際理解教育の推進 <富山県> (発表要旨)

先進的に取り組んでいる県内各校を視察し、校長の果たす役割について研究してきた。

①国際理解教育で配慮すべき事項

ア 「共生」「自己の確立」「コミュニケーション能力」等の視点から指導計画を作成する。

イ 国際的な視野をもって、共に生きようとする実践的態度が育つ教育活動を充実させる。

ウ 学習環境の整備や研修の充実を図り、校長がリーダーシップを発揮する。

②地域や学校の特色を生かした取組

ア 黒部市立C小学校では、国際化教育特区に認定され、英会話学習を行っている。

イ 南砺市立F小学校では、米国の児童との交流で異文化を理解する機会にしている。

ウ 富山市立I小学校では、小学校6か年を通して、国際交流活動を実践している。

エ 富山市立C小学校では、E S Dを実践し、他国の人々のことも思いやれる活動を推進している。

(協議内容)

①東日本大震災の救助隊や青年海外協力隊などについて外部の方から話を聞く機会をつくっている。日本と外国との友好関係を築くことを指導している。

②交流については、セレモニーは交流センター、ホームステイはPTA、学校は学校滞在時の世話というように分担している。

③校長のリーダーシップとしては、校務分掌での組織作りが大切である。若手教員の増加のため研修が重要となる。また、予算の確保や執行は校長の大きな任務である。

(2) 外国語活動の推進に向けた学校経営と校長のリーダーシップ <静岡県>

(発表要旨)

どのようにリーダーシップを発揮していったらよいかを、次の4つの視点から研究した。

①「価値付ける」ための校長のリーダーシップ
ア 育てたい子ども像や付けたい力等の関連を全教員が共通認識し、同一歩調で取り組む。
イ 他教科、領域との関連を示すことで、教育活動の中の位置付けを明確にする。

②「整える」ための校長のリーダーシップ
ア 校内の体制づくりや自校における実態に応じた外国語活動の目標づくりをする。
イ 教育課程の工夫や日課での位置付け、外部人材活用、ICTが活用できる環境づくり、教育行政機関への働きかけ等の取組を推進する。

③「つなぐ」ための校長のリーダーシップ
ア 地域の人材を活用することで、その地域な

らではの外国語活動を展開する。

イ 外国語活動の取組を地域に知らせるとともに助力の要請を伝える。

④「育てる」ための校長のリーダーシップ

ア 外国語活動を充実させるために、教員個々の指導力を向上させることが求められる。

イ 研究指定の発表会へ教員を派遣したり、外部講師を招聘したりする。

(協議内容)

①A市では小学校から英語活動を実践しているので、小中学校の連携を進めている。

②各学校の教育課程の事例（裁量時間に行うEタイム、集中的に取り組むE E週間）についての質問がなされた。

③教職員の意識が高ければ、ICTなどの教育機器を意図的に使用できる。先進校の取組から学ばせることが重要である。

④教員の負担感解消の手段として、中核教員が研修内容を校内に広めたり、ALTを上手く活用したり、校長が外国語活動の目標を保護者に説明したりすることが必要である。

(3) 国際交流活動及び帰国・外国人児童の学力保障に向けた取組と校長のリーダーシップ

〈愛知県〉

(発表要旨)

異文化を理解して尊重する態度や異なる文化をもった人々と共に生きていく能力や資質を育むことと、日本語が理解できない帰国・外国人児童の学力を保障することの2つの視点について校長の指導性の研究を進めた。

①国際交流活動推進における校長の指導性

ア 活動の内容は、外国人を学校に招待、外国人とスポーツ交流、写真、ビデオなどの交換をしている。

イ 校長は、地域、保護者、交流国と教職員の連携強化に努めている。

②関係機関との連携による校長の指導性

ア 来日間もない日本語指導の必要な児童に対し、日本語指導・適用指導を集中的に行うことを目的とした「ことばの教室」が市内に2校設置されている。

イ 近隣大学との連携を深め、学生ボランティアが日本語指導や学習の支援をしている。

③教職員の研修への参加における校長の指導性

ア 豊田市教育国際化推進協議会（企業、高等

学校、教育委員会、こども園、市役所国際課、小中学校などが構成員）が研修会を行っている。

イ 初任者研修会での1講座を帰国・外国人児童生徒理解に充てている。

(協議内容)

①愛知万博でのフレンドシップ事業以来、継続して、作品交換、メール交流している学校もある。

②子どもたちの交流については、その国の政治情勢や予算削減に左右されるという課題があげられる。

③美しい日本語も大切にしたいものである。発信するためにも、古典をはじめとする日本人としての国語力を重要視していきたい。

④国や通った学校によって違うので、その子の特性を保護者とよく相談し、対応していかなければならない。

3 まとめ

国際理解教育の推進に当たっては、地域や学校の特徴を踏まえながら、学校の指針を明確に示し、ねらいを達成すべき指導計画の策定にリーダーシップを発揮する必要がある。特に外国語活動はコミュニケーションをとるツールとして、学校のこと、地域のこと、日本のことなど外に発信する機会を積極的につくっていくことが校長の責務である。さらに、活動を推進する上で不可欠な人材の活用や予算の確保についても主体的に関わっていかなければならない。

また、子どもの内面、とりわけ、日本文化に自信がもてる子を育てていくことが国際理解上必要ではないだろうか。



第⑨分科会

家庭・地域・異校種等連携

研究課題

信頼される学校づくりに生かす、家庭・地域・異校種等との連携

研究協議題

- (1) 家庭・地域社会との連携による相互理解と信頼される学校づくりの推進と校長のリーダーシップ
- (2) 幼保小中連携を生かした教育活動の推進と校長のリーダーシップ

1 基調提案

様々な環境の変化にも柔軟に対応できる「生きる力」を身に付けた児童を育成するためには、学校と家庭・地域が今まで以上の強い信頼関係で結ばれ、連携して教育活動を充実させていくことが求められている。

地域社会全体で協働して児童を育成する学校・家庭・地域の横の連携と、幼保小中の異校種間で、学びの連続性としての成長過程の縦の連携と、それぞれに役割と責任を自覚し、様々な交流を通して新しい教育観を共有することが大切である。

以上から、信頼される学校づくりを目指すために、学校として家庭・地域・異校種等との連携の進め方、その際、校長が果たすべき役割と指導性について明らかにする。

2 研究発表及び協議

(1) 地域の実情に即した家庭・地域・異校種等との連携と校長のリーダーシップ <三重県>
(発表要旨)

過疎化が進む地域において、家庭・地域・異校種等の連携を強めていくための校長のリーダーシップについて研究実践を発表した。

①学校行事を中心とした教育活動を通しての保護者・地域との連携強化

- ア 幼稚園・小学校・地区合同運動会の取組
- イ 地域の文化展（公民館活動）への取組
- ウ ふれあいサロン（お年寄りの女性サークル）との連携

エ 6年生を送る会の取組

②学力向上や防災教育等の取組を通しての学校間・保護者・町教育委員会との連携の強化

- ア 校長会研修会の取組
- イ 学力向上委員会の取組

③幼・保・小・中等の連携強化

- ア 幼保小中連絡会等への取組

イ 校区連絡会の取組

④まとめ

ア 地域に根ざした教育実践を進めることが重要。そのために、校長が先頭に立つ。

イ 地域で話し合う場合は、教育活動を発信する絶好の機会ととらえる。

ウ 学力向上のために学校間の取組の交流をするなど校長の指導性が大切。

エ 学校行事等のねらい・取組を説明することで保護者・地域との連携を強化する。

オ 教科の系統性や指導内容・方法、児童の実態について、幼保小中で連携をさらに強化する。

(協議内容)

①家庭学習の手引きを通して、読書活動を充実させ、学力向上を図る。療育の面では個人カルテの作成に着手。

②防災教育については、山に逃げる道を確認したり、防災マップを作ったり、地域の防災活動に子どもも参加したりする。

③小1プロブレムや中1ギャップの解消に、持ち回りで授業参観をしたり生活面を中心に話し合いをしたりと取り組んでいる。

(2) 七尾市内全小・中学校と家庭、地域が連携して進めるプロジェクト活動の推進と校長のリーダーシップ <石川県>

(発表要旨)

「ふるさと七尾に誇りと愛着を持ち、知性と感性に富み、人間性豊かでたくましい、活力に満ちた人づくり」を目指し、校長のリーダーシップが大きく関わった研究実践を発表した。

①伸ばせ！七尾っ子プロジェクト

- ア 挨拶運動
- イ ノーテレビ・ノーゲームの日
- ウ 親子読書、お手伝い、親子の会話等

②親子ドリームプロジェクト

- ア 小中学生親子を対象とした高等学校説明会

③ふるさと文化芸能継承子ども発表会

④6 中学校区教育フォーラム

⑤情報発信

ア 各学校の学校だよりやホームページ

イ ケーブルテレビなどでおで小中学校の活動紹介

⑥まとめ

ア 七尾っ子の生活力と学力は、着実に向上してきている。

イ 学力については、学校間格差が課題である。

ウ 「伸ばせ！七尾っ子プロジェクト」「親子ドリムプロジェクト」等で、家庭・地域・学校が連携・協働し、それぞれの役割と責任を果たすことにより、地域の教育力も向上してきている。

(協議内容)

①ケーブルテレビを利用した情報提供では、放送内容をDVDでも学校へ配布し、学校で視聴できるなど、広く情報提供できるよう努めている。

②教育フォーラムでは、連携という観点から、保護者の関心を高めることが課題。

③地域との連携によるふるさと教育では、伝統芸能「七尾まだら」や、郷土出身の著名人・長谷川等伯などについて学ぶカリキュラムを作っている。

(3) 学びの連続性を見据えた幼保小中の連携の在り方と校長のリーダーシップ <愛知県>

(発表要旨)

幼保小中の学びの円滑な接続のための連携の在り方と、小学校教育を推進する校長の指導性について研究実践を発表した。

①幼稚園・保育所との連携

ア 合同研修会の実施

イ 授業の参観・参加等、学習活動の充実
・生活科の幼保小接続单元など

ウ 保護者への情報提供

②中学校との連携

ア 小中連絡会の実施

・中学校生活の説明、施設見学、授業参観、
スクールランチの試食等

イ 小中合同研修会の実施

・授業参観、グループ別学習会、講演会

ウ 教育条件の整備

・スクールカウンセラーを名古屋市内全中学校に配置、小学校にも年間30時間の配当

③まとめ

ア 教職員の交流や子どもの交流により、幼保小中の円滑な接続が進められている。

イ 指導内容や指導法の見直し、指導体制の整備などの面で校長のリーダーシップのもと、小学校教育の更なる充実が重要。

(協議内容)

①小1プロブレムについて

ア 幼保小接続单元により、小学校を見聞することで、小学校入学を楽しみにするようになる。

②異校種連携のための計画・準備の工夫について

ア 授業参観を伴う等、子どもの活動の関わる研修会は夏季休業前の午前授業日を活用。

イ 教職員のみでの研修会は夏季休業中に行う。

③スクールカウンセラーの活用について

ア スクールカウンセラーは臨床心理士の資格を持ち、全中学校に配置。

イ 中学校に入学した時、小学校で相談した同じカウンセラーに相談でき、継続的で安心して相談できる。

3 まとめ

家庭・地域・異校種等との連携に果たす校長のリーダーシップについて、次のことが大切である。

(1)地域の实情に合った、地域に根ざした教育活動を大切に、連携を強化する。また、家庭・地域・学校が連携・協働し、それぞれの役割と責任を果たす。

(2)幼保小中の連携では、円滑な接続を進めるために、指導体制を整えたり、指導内容や指導法の見直しをしたりすること、また、中学校区内で共有する経営構想を確立すること。

(3)明確なビジョンを家庭・地域・教職員に発信、浸透させ、地域の声を学校評価に生かし、開かれた学校、信頼される学校作りに生かす。



第10分科会

環境教育

研究課題

環境に対する豊かな見方や考え方の育成を目指す環境教育

研究協議題

- (1) 人間と環境との在り方について豊かな見方や考え方を育む環境教育の推進と校長のリーダーシップ
- (2) 家庭・地域社会と連携した環境教育の推進と校長のリーダーシップ

1 基調提案

東日本大震災では、想定を超える大規模な地震、大津波によって多くの人命が失われ、自然災害の恐ろしさを改めて知らされることとなった。また、それに付随して起きた原発事故により、エネルギー政策の見直しがなされ、自然エネルギーを基幹エネルギーの一つとしていくことや省エネルギー社会を実現するための様々なシステムを整えていくことが、今後問われている。

このような社会の変革の波の中で、児童には未来の社会の在り方や自らのライフスタイルと関わらせて環境問題と向き合い、自然との共存、共生について理解し、自分たちの手で未来を切り拓いていく姿勢が求められている。そのためには、自己及び人間と環境との関わりを理解し、その中で自然の持つすばらしさや豊かな恵みに気付くこと、そして、未来や自分のライフスタイルと照らし合わせて環境についての考えを持ち環境に関わっていくという実践的な態度を身につけることが重要である。

そこで、上記の研究協議題に基づいて、環境教育の創意ある教育課程の編成や指導方法の工夫、及び学校全体で組織的に取り組む方法について協議し、環境教育の豊かな学びの実現の具体的な究明を図る。

2 研究発表及び協議

- (1) 家庭・地域との連携を図った環境教育と校長の指導性
 <岐阜県>
 (発表要旨)

体系化（学年間のつながり等を考えた指導計画）、組織化（運営体制・指導体制の充実）、連携強化（家庭・地域、関係諸機関等との連携、情報発信）を柱とし、今まで取り組んできたも



のを環境教育という視点から見直すことで環境教育の一層の充実を図った。

- ①地域の老人クラブとの連携による自然肥料を使った野菜作りを通して、自然環境との関わりや自然の恵みについて学ばせる実践
- ②PTAとの連携による古本のリサイクル活動を通して、資源を大切に作る心やよりよい環境を作ろうとする気持ちを育てる実践
- ③森林組合との連携による総合的な学習の時間における枝打ち活動を通して、森林の役割や森林保全について考えさせる実践

(協議内容)

- ①土岐市全体で実践していくために、体系化、組織化、連携強化をキーワードに、今あるものを環境教育の視点で見直すことを共通理解とした。
- ②環境教育の取り組みはイベント的なものになりがちである。そうならないように、児童の体験を体系化し、継続していくとともに機能的な組織を構築していくことが必要である。
- ③幼保小中の一貫した環境教育を構築していくことも課題である。

(2) ふるさとに愛着を持たせ、誇りを育てる活動を通して、その成果を地域に発信したり新たな学びを育てたりする環境教育と校長のかかわり

＜福井県＞

(発表要旨)

地域学習（地域の歴史・文化学習を通してふるさとを誇りに思い、大切にする）、地域との連携（地域の自然を守る活動を通して身近な地域社会と自分との関わりを見つめ直す）、地域への発信（自分たちにできることを通して新たな学びを持つ）の三つの視点から環境教育の推進を図った。

- ①地域学習として、現地のフィールドワークを通じて史跡や昔話など地域の魅力を再発見させた実践
- ②地域との連携として、老人会や森林組合と連携して苗植えや植樹をした地域環境の美化・緑化の実践
- ③地域への発信として、ごみを捨てにくくする赤鳥居・ごみ0看板の設置、北潟湖の水質調査とその結果を地域に発信する実践

(協議内容)

- ①学校の多忙化を軽減するためには取り組みの精選が重要だが、地域と関わりが深くなるとありがたい反面やめづらくなるという苦しさがある。
- ②校長の思い、熱意が地域との連携では何より大切である。まず、校長が地域の魅力、すばらしさを知った上でプランを示さなければならない。
- ③地域行事への関わりなど、教職員と地域との繋がりの強化も課題である。

(3) 地球環境を広い視野でとらえ、身近なことから行動する児童の育成

＜愛知県＞

(発表要旨)

広い視野と長期的展望で環境問題を考える児童、環境をよくするために自分のできることをやり遂げる児童を育てるため、グローバルな構想と身近な実践の両面から環境教育の充実を図った。

- ①町内全小学校の5年生を対象としたアンケート調査を軸にして、子どもたちに将来の地球環境を構想させた実践

- ②グループで実施するコンビニのゴミ箱の調査など、自分たちでできることを見つけてやり遂げさせようとした実践

- ③実態調査を基に学習発表会で発表するなど調査活動の充実と発信の充実を結びつけた実践

(協議内容)

- ①環境教育は往々にして、暗く重くなりがちである。夢と希望を持って将来の社会を構想するという視点がよい。
- ②担任の負担を軽減し学習のさらなる深まりを期待する手段として、専門家を入れたりユネスコのような既存組織を活用したりすることも一つの方法である。
- ③環境を守る行動や努力をしても、急に目に見えた成果が現れる訳ではない。成果を具体的に見通すことができないことが環境教育の課題である。

3 まとめ

環境教育の豊かな学びを実現するために必要なこととして、次の三つが明らかになった。まず、活動が一過性のものにならないよう継続性を持たせることが大切である。次に、教育に偏りができないよう活動に多様性を持たせることが必要である。そして、環境問題の将来性を児童に重く受け止めさせることが重要である。

そのような環境教育を推進するために、校長は、機能的な職員の体制をつくること、職員の意識を高めること、活動を計画する際の視点をつくること、の三点において強いリーダーシップを発揮していかなければならない。



第11分科会

特別支援教育

研究課題

自立と共生を育む特別支援教育

研究協議題

- (1) 一人一人の個性や能力を伸ばし、自立を目指す特別支援教育の推進と校長のリーダーシップ
- (2) 共生・交流を推進する特別支援教育と校長のリーダーシップ

1 基調提案

平成19年4月より現在の特別支援教育が実施されることとなった。校長は自らが特別支援教育や障害に関する認識を深めるとともに、教職員を指導することが求められている。更に、インクルーシブ教育が検討される中、子どもにとって連続性のある「多様な学びの場」を用意していくことが必要となっている。また、学習指導要領に明文化し位置付けられた「交流及び共同学習」の実施に向けても校長は対応をしなければならない。

こうした課題を踏まえ、校長は自立と共生を育む特別支援教育の推進に向けて、リーダーシップを発揮して教職員の指導力向上と校内条件整備に一層取り組むことが重要となっている。以上から、上記の研究協議題を設定し、校長のかかわりとリーダーシップについて究明することにした。

2 研究発表及び協議

(1) 一人一人の自立を目指した学校経営と関係機関との連携の推進 <富山県> (発表要旨)

①ユニバーサルデザインの視点に立つ学校経営
校長のリーダーシップのもと、ユニバーサルデザインの視点の指導を重視することで、どの子どもにもよりよい支援を目指す。

また、教師個々の力をチーム力に生かすため、指導が困難な学級に対しては担任のない者が授業をしたり、特別支援学級の交換授業を行ったりする。

②地域の支援組織との連携：グランドモデル地域の取り組みの活用

乳幼児から成人期までの一貫した支援が受けられるように施設関係、保健センター、教育関係機関等で情報交換を行い、地域での支

援体制を強化する。保護者が記録する相談支援ファイルを作成し、地域での就業・進路の指導に生かす。

(協議内容)

①ユニバーサルデザインについて

指導困難な学級があり対応に苦慮したが、ユニバーサルデザインをもとに学校運営をした結果、よい方向に向かっている事例が数校から出された。校長のリーダーシップのもと、教職員の思いや考え・指導の方向性を明確にすることが大切である。

②関係機関との情報交換について

進学や就労等、子どもたちの将来に関する情報が必要である。地域により連携協議会の構成も違うが、関係機関を生かして情報交換をしていくことが大切である。

(2) 特別支援教育を推進する教職員の資質の向上と校長の関わり <静岡県>

(発表要旨)

特別支援教育の充実を図るには、日常の授業における指導をより確かなものにしなくてはならない。そのためには教職員の資質向上が重要であり、校長が的確に関わることが大切であると考え、以下の取り組みをした。

①校長が心がけるべきことの確認

②実態の把握と効果的な支援の在り方の追求

通級指導教室や特別支援教育対象児の多い通常学級の参観を通し、言葉がけ・環境づくりを学ばせる。

③特別支援教育充実のためのシート作りと課題把握

校長として念願する教師像・授業像・学級像をまとめた「特別支援教育推進のための確認シート」を使い、教職員が自己評価をする。結果をもとに学校の課題と個々の教職員の課題を校長が把握する。

④把握された課題に対する改善の働きかけ

(協議内容)

①「特別支援教育推進のための確認シート」について

市では42校中9校が確認シートを使用している。内容の改善を図りながら全市に広げたい。また、外部への結果の公表や評価については今後の検討課題としたい。

②視点教員について

確認シートをもとに課題をもつ教職員を「視点教員」として、校長の指導のもと改善を図り、資質向上を目指している。

③特別支援教育に対する保護者への啓発について

市より特別支援教育の理念を全家庭に配布している。また、学校でも便りで考えを示しながら保護者への働きかけをしている。保護者との信頼関係の構築が欠かせない。

(3) 保護者・地域・関係機関との連携を図る特別支援教育

＜愛知県＞

(発表要旨)

障害のある子どもたちに適切な指導を行うためには、校長がリーダーシップを発揮し、保護者・地域・関係機関との連携を図りながら、学校の支援体制を機能させる必要がある。各校の現状を踏まえ、次の2点について研究を進めた。

①本人・保護者の思いを大切にした就学相談の充実

就学前は幼・保・市教委と連携して就学相談を進めている。学校見学会や体験入学の実施、特別支援教育連携協議会（市教委主催）の取り組みの周知等を通して相談活動の充実を図っている。

就学後は関係機関や専門家と連携して就学相談を進めている。校内特別支援教育委員会で支援内容を検討し、支援グループを発足する。支援グループは、個別の指導計画の作成、実施状況の確認・分析を行い相談活動を進めている。

②市内特別支援学級合同行事の充実

昭和50年から保護者・地域・関係機関との連携を図りながら合同宿泊学習「山の学校」、もちつき会・おたのしみ会、合同学習発表会を実施している。

(協議内容)

①合同行事について

他地区での事例が紹介された。行事に校長が参加することで、保護者・子ども・職員には言葉以上に訴えるものがある。参加者が年々増加しているため、連絡調整や効果・ねらいの見直しが大切である。

②保護者の思いについて

地域連携協議会において保護者から就学・就労についての不安の声が聞かれる。切実な保護者の思いを校長会で伝えている。

保護者との相談にあたっては、専門家の意見を常に取り入れていくことが大切である。

3 まとめ

子ども一人一人への適切な指導・支援を行うためには、教職員の資質向上が求められており、その取り組みが各学校で図られている。ユニバーサルデザインのもと、全職員が明確な目標をもち、実践に取り組んだり、「特別支援教育推進のための確認シート」を用い個々の力量アップを図ったりしている。いずれも校長のリーダーシップがそのカギを握っている。校長自らが研修し、的確な指導・助言が行えるようにしなくてはならない。

保護者にとって一番の心配は就学・就労である。各学校では地域の支援組織との連携を図ることはもとより、校内での組織を確立して保護者との対応にあたっている。とはいえ、個々の状況は様々であり、学校だけでは十分対応できない場合もある。校長は市町村の政策・制度、関係機関との積極的な情報収集と連携に努める必要がある。

インクルーシブ教育が検討され、より一層特別支援教育への期待と責任が大きくなる。同時に校長としての力量を高め、リーダーシップを発揮していく必要があることを確認した。



第12分科会

情報教育

研究課題

情報活用能力を高める情報教育

研究協議題

- (1) 情報教育における環境を整備し、ICT活用指導力の向上と校長のリーダーシップ
- (2) 情報社会に参画する態度を育てる教育活動の推進と校長のリーダーシップ

1 基調提案

変化の激しい情報社会を子どもたちが生き抜くためには、様々な情報手段を活用し、必要な情報を取捨選択し、問題解決していく主体的な能力の育成が大切であり、「生きる力」を育むための「情報活用能力」の育成の重要性が説かれている。このような中、情報教育や教育の情報化に関して様々な施策が行われ、子どもたちの情報活用能力は少しずつ高まってきているものの、ICT技術の発達とともに情報モラルの欠如、セキュリティへの認識の甘さ等、危険が多く取り巻いている。

そこで、情報活用能力の育成について、校長はどのような学校経営、教育課程の編成をしていくべきか、協議を深めたい。

2 研究発表及び協議

(1) 情報活用能力や情報モラルを高める情報教育の推進と校長の指導性

<岐阜県>

(発表要旨)

情報化社会の中で、子どもたちが情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、情報社会に参画しようとする態度を育てることは極めて重要である。そこで、校長の指導性を発揮しながら情報モラル教育を推進するため、次の3点について研究に取り組んできた。

①推進体制、環境整備の在り方

情報主任をモラル教育推進のキーパーソンとしてとらえ、校長会より教育委員会に働きかけて郡情報主任会を位置付けた。また、各学校で指導計画を作成するためのソフトを郡内に整備するよう予算措置を働きかけた。

②教師の資質向上を目指す研修の在り方

校長から情報主任に働きかけて校内研修を

積極的に行った。また、郡情報主任会を情報主任の研修の場としても位置付けた。

③PTAとの連携の在り方

校長会から働きかけ、郡PTA研修大会において、情報モラルに関わる研修会を行った。また、各学校では、情報モラルの授業内容について保護者に情報発信し、理解を得るように働きかけてきている。

(協議内容)

- ①情報主任会を立ち上げ、情報交換や研修の場としていることは意義深い。今後は、この推進体制を生かしながら、教材やソフトの共有等、各学校の校長間で連携して取り組むことが大切である。
- ②携帯電話やゲーム機等は学校外で使うことがほとんどなので、情報モラルを高めるためにはPTAとの連携が不可欠であり、今後、各学校・地域でどのように連携を強化していくかが課題である。

(2) ICT活用指導力を向上させるための校長のかかわり

<石川県>

(発表要旨)

学習指導要領では、教育の情報化が重要であると示されている。そこで、教員のICT活用能力を伸ばすための環境整備、教員のICT活用能力を高めるための校長のかかわりの2点について研究に取り組んできた。

①ICT環境整備

子どもたちのICT活用能力に学校間格差が出ないように、また、教員が異動の際に情報機器を使いやすくするために、市の情報教育部会を設けた。部会では、情報教育年間計画の作成、共通に使用するソフト等の洗い出し、研修会の開催等を行っている。

また、各学校では、各学級に大型テレビを

設置したり、各教員にデジタルカメラを配付したりして、情報機器をすぐに使えるような環境整備を進めてきた。さらに、県外の先進校の視察や県内の実践研究校の参観等、多くの教員に学ぶ機会を与えている。

② ICT活用能力の向上

教員のICT活用能力を高めるために、情報機器の活用の推進、教育課程の見直し、計画的な校内研修、先進校の視察研修を中心に取り組んできた。

(協議内容)

①情報教育を進める上で大切なのは、教員自身が機器に慣れることである。そのためには、スイッチ一つですぐに使える環境を整備したり、実際に使ってみる機会をより多く設定したりすることが必要である。

②ねらいを明確にして計画的に取り組むことが、教員のICT活用能力の向上につながる。

また、ICT支援員等を活用して、スキルを高める研修会や実技的な講習会を設定し、計画的に研修を進めることが有効である。

(3) ICT環境整備とICT活用指導力の向上に求められる校長のリーダーシップ

＜愛知県＞

(発表要旨)

情報社会を生き抜くために、子どもたちに情報活用能力を身に付けさせることは、「生きる力」を育てる大切な力の一つとなる。そこで、情報教育に関する校長のリーダーシップを明らかにするため、次の2点について研究に取り組んできた。

① ICT環境整備

校内LANや普通教室でのインターネットが接続できる環境が整い、各学校では自校の教育目標や学校規模等を見据えて、ICT機器の保守を含めたICT環境整備計画を推進している。また、多くの学校が特色ある学校づくりを目的とした市の応募事業を活用しながらICT環境整備を実現している。

② ICT活用指導力の向上

各学校では現有ICT機器を有効に活用しながら実践的な現職教育を行ったり、研修会を開いたりする等、ICT活用指導力を向上させる取り組みが進められている。また、市の教育センターが主催する夏季休業中の情報

教育講座には、例年定員を超える多数の応募者がある。今後の更なるICT活用指導力の向上に向け、ICT機器の活用に堪能な外部人材の配置を多くの学校が希望している。

(協議内容)

①教員一人に1台のコンピュータが貸与され、校内LANが整備されたりした現状から、今後のICT環境整備に向けては、校務システムの活用やセキュリティの確保等が課題となる。

②教員のICT活用指導力の向上のために求められる校長のリーダーシップとして、例えば校長が率先して電子黒板を使って会議をしたり、プロジェクタを使って講話をしたりすることも大切である。

3 まとめ

ICT環境整備については、各県・地域によって予算執行やICT機器の整備状況等に差があるので、各地域の学校間・校長間の情報交換を密にして、共通に使用することのできるソフトを洗い出したり、メールシステムを確立したりする等の取り組みがより効果的である。

また、ICT活用指導力の向上については、子どもたちが毎日学習する学級に複雑な操作や技術を必要としない使いやすい情報機器を配置し、教員が実際に活用する機会を増やす工夫が必要である。さらに、情報モラル教育推進のためには、教員の資質向上を図る研修や家庭・地域との連携を深める取り組みを計画的に進めることが大切である。



特別分科会

教育課題

研究課題

新しい時代を拓くための学校力の向上

研究協議課題

- (1) 教育の新しい動向を踏まえた学校力向上の推進と校長のリーダーシップ
- (2) 新しい教育諸課題への対応と校長のリーダーシップ

1 基調提案

学校教育は、社会の激しい変動の影響を受けた時代の波の中にあると言える。その中で、我が国の競争力や子どもたちの学力の低下が指摘されている。また、地域におけるコミュニケーションの機会の減少等も指摘されている。

こうした時代背景がある中、学校は、今こそ「学校力」を高める方策を立案していくことによって、新しい時代の教育を拓いていくことが重要だと考える。時代の流れを敏感に感じ取り、教育の動向を踏まえつつ、具体的なプランに基づいた教育活動を推進し、新たな諸問題にも迅速に対応しなければならない。

以上のことから、新しい時代を拓くために欠かせない学校力の向上をどのように考え、推進していけばよいかを究明したい。そして、校長のリーダーシップをいかに発揮していくべきかを明らかにしたいと考えた。

2 研究発表及び協議

人材育成の在り方についての調査研究

～ 若手、ミドルリーダーの育成 ～

<愛知県>

(発表要旨)

(1) 研究の視点

若手とミドルリーダーの人材育成を適切に行うことは、学校運営を円滑に進めていくために必要不可欠である。そこで、学校現場が求めている人材育成についての考え方を調査・分析して、人材育成の在り方を明らかにし、人材育成を踏まえた学校経営について考えたい。

(2) 研究の概要

①研究の方法

名古屋市立小中特別支援学校長全員に対し、

次の内容のアンケート調査を実施し、その結果を集計し分析する。

ア 各校で行っている人材育成の取り組みの内容

イ 人材育成を進める上で困っていること

ウ 人材育成に向けての校長としての考え

②研究の内容

ア 各校で行っている人材育成の取り組みの内容

若手教員の力量アップに向けて、小学校では「授業研究」が多く、中学校・特別支援学校では「校内研修」が多く取り組まれていた。

ミドルリーダーの育成に向けて、中学校では「管理職の意識的な個別指導」が多く、授業の空き時間を活用して個別指導を行っていることがうかがえた。

イ 人材育成を進める上で困っていること

教員自身の資質、人間性に関わる内容について多くの回答があった。また、育てる側の管理職の姿勢についての意見も見られた。

ウ 人材育成に向けての校長としての考え

「管理職が教員と話をする機会を多くもつ」、「教員に立場を与える、適材適所の分掌の工夫をする」、「メンターチーム、学校連携など研修の方法を工夫する」等の考えが多かった。

(3) 研究のまとめ

今後の学校には、人材育成を踏まえ、チーム力を一層向上させることが望まれる。そのために、校長自身がどんな意識で学校を経営していくのかが、「今」問われている。校長として、次の点を再確認したい。

○教員のよさを認め、実際に褒めることにより、人材を育成するという意識を校長自身ももつ。

○人材育成は、効果が上がるまでに時間がかか

る。多忙ではあるが、今後に向けて必ず策を講じる。

- 教員は現場で育てることを念頭に置き、校長自身が人材育成を進める。(先進地域や市内の事例を参考にする。校外の研修、研究会との関連を図る。)
- アイデアを進んで交流し実践する中で、学校マネジメント力を校長自身が高めていく。



(協議内容)

- ①メンターチームを作って人材育成を図る方法
低・中・高学年のグループに分けて、ベテランが若手の授業を見るように働き掛ける。小学校では学級の壁ができやすく、中学校のように多くの教員で子どもを見ることができにくいので、合同体育・学年集会等を活用して、学年主任を中心とした取り組みを意図的に行わせる。
- ②学年や教科を越えた取り組み
小規模化している小学校が多いので、教科部会ではできても、学年部会が成り立たない学校が増えている。そこで、有志による研修会を設け、50代のモチベーションアップを図るようにしている。体力があまりない中堅には、アイデアを出してもらおう。教育センター等の学校以外でよく学べても、学校では生かせないこともあるので、教員同士でクリエイトしていく活動を行えるようにしている。
- ③人材育成についての教員の現状
静岡県の教員の現状は名古屋市と似ていて、6年未満の教員が増加傾向にある。5年たつと、10年未満の教員が30%を越えると思われる。若手・中堅教員の指導も大切であるが、将来の管理職をどう育てるかが重要課題である。校内研修を重視し、授業研究での議論を大切にする。校長が最後のまとめでどんな分析をするか、他の教員とは異なる観点での考

えを述べることができるかが大切である。そのために、授業を見る目、分析していく力を高めたい。また、校長が、日々教員のよさを褒め、主任層にも働き掛けることが大切である。

④学校と地域との連携

中学校区の地域・保護者・教員の代表が話し合う機会を設定し、見守り活動・ボランティア活動への協力依頼をする。中学校区の教員同士で研修会を開いたり、悩みを話す機会を設けたりする。

学校が地域に要求するだけでなく、学校が地域に還元できるようにすることも大切である。校長自身が地域に足を運んで、学校と地域とをつなげていく役割を果たす必要がある。

⑤地域との交流における配慮

地域の行事には校長・教頭が代表で参加し、他の教員は、自主参加とする。地域が全教員の参加を求める場合は、日曜日を授業日にして、休業日の振り替えをする。平日でも地域の行事が行える場合は、積極的に地域と連携することにより、学校力を高めたい。地域の人と子どもとの面識ができ、コミュニケーションを図ることにつながる。

3 まとめ

ミドルリーダーの育成においては、校長が意図的に学校経営を進めていることを、若手とミドルリーダーがどのように受け止めているかについて、面談や日常の会話を通してつかんでいく必要がある。校内での指導力向上に向けての働き掛けが役立っていることを、教員にも気付かせるようにしたい。

日々接する機会が多い教頭・教務主任をどう育てるかを考え、校長会等の資料を示したり、校長自身の考えを伝えたりしていくことが大切である。現職教育等の機会を活用して、自主研修の進め方を伝えたり、発想力や創造力を伸ばさせたりする工夫も必要である。

校長のリーダーシップとしては、教員や地域にどのように仕掛けていくかを考え、動いていける体制作りをして、学校経営に生かしていかなければならない。その場合、校長が先頭を走るのではなく、後ろから支えていくことにより、リーダーシップを発揮していくことの重要性が改めて確認された。



大会宣言文決議

東海・北陸地区連合小学校長会 岡 田 豊
大会宣言文起草委員長

各県の委員の方々のご意見を伺い、慎重に審議を重ねてきました。大会宣言文（案）を朗読し、提案とさせていただきます。

大会宣言文

東海・北陸地区連合小学校長会は、激動する社会情勢に対応し、新しい時代を拓く小学校教育の創造と推進を図るべく、常に研究と実践を積み上げ、着実に成果を収めてきた。

新学習指導要領全面実施が2年目となる今、私たち校長は、子どもたちの姿を通して、その手応えとともに新たな課題もつかみつつある。新しい教育の可能性を追究しながらも、教育の原点を見失うことなく、「生きる力」を育てる教育の舵取りに精力的に取り組むものである。

東日本大震災後、日本は、これまでに遭遇したことのない困難な問題に立ち向かっている。東海・北陸地区においても、被災地における苦難を理解し、支援することを通して、小学校教育の果たす役割がいかに重要であるかの認識と国の将来を担う子どもたちを育てるという使命感を一層強めている。

学校は、かけがえのない一人一人の命を守るとともに、子どもには私たち教員の想像を超える可能性が秘められているという信念と深い愛情をもって、どんな状況にあってもたくましく生き抜く人間を育てなければならない。

そこで、本大会では、大会主題「新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を掲げ、副主題を「確かな学力・豊かな心・健やかな体を養い、未来に向かって生きる力の育成を目指して」と設定した。

この主題に迫るために、校長は自らの使命を自覚してリーダーシップを発揮し、小学校教育の更なる充実・発展に努めなければならない。

ここに、第47回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究愛知大会の総意に基づき、左記の決意を表明し、その実現に向かうことを宣言する。

記

- 一 夢や希望をもち、知・徳・体のバランスのとれた日本人を育てるための教育課程を推進する。
- 一 知識基盤社会において、主体的・創造的に問題解決に立ち向かうための思考力・判断力・表現力を育てる授業実践を推進する。
- 一 確かな児童理解と自尊感情を高める指導により、豊かな感性をもって人と関わり合う心を育てる教育活動を推進する。
- 一 教職員の資質向上を図る研究・研修を推進するとともに、マネジメント能力を高め、協働する学校組織づくりを推進する。
- 一 身の回りの環境や自然について正しく理解し、自分の命を守るための判断力や主体性を育てる防災教育及び安全な教育環境整備を推進する。
- 一 家庭や地域社会の教育ニーズを的確にとらえ、連携を深めるとともに、学校の使命とビジョンを明確にし、信頼される学校づくりを推進する。

平成24年10月19日

第47回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究愛知大会

(注：原文は縦書き)

※満場一致で承認されました。



閉会のあいさつ

東海・北陸地区連合小学校長会 木村 博彦
愛知大会副会長

東海・北陸地区の各地から愛知・名古屋にお越しいただきました皆様、この二日間、充実した時間を快適に過ごしていただけたことでしょうか。

さて、本愛知大会は、平成20年度から引き継がれてきた「新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進」という大会主題の最終年度として、総括の大会と位置づけられ、これまでの東海・北陸地区連合小学校長会の研究成果、および前大会であります福井大会での研究協議をより発展させていくという大切な役割を担った大会でした。昨日の13の分科会での基調提案、各県の代表の先生方による研究実践発表および協議、そして、グループに分かれての協議・情報交換と、大変中身の濃い研究会をもつことができました。とくに、午後のグループ協議では、参加していただいた先生方の日頃の実践に基づいた活発な発言により、どの分科会でも大変盛り上がった協議を行うことができました。そして、その中で東海・北陸地区7県の校長先生方が互いに理解と連携を深めることができ、これまで以上に固い絆で結ばれることができたものと確信しております。

また、まだ今も余韻が残っておりますが、先ほどの記念講演会では、山根一眞様から「はやぶさ」の壮大なプロジェクトから得られた教訓をもとに、私たち教育に携わる者が大切にしていかななくてはならないことについて、多くのご示唆をいただきました。この二日間の研究大会で得られた成果は、今後各地区の各学校での教育活動の充実に向けて大きく役立つとともに、来年度の三重大会に着実に引き継がれていくものと確信しております。私ども愛知の小学校長977名は、3年前から実行委員会を組織し、一丸となって、参加していただく先生方に「愛知に来てよかった」と思っていただけのように、研究協議の充実、そして何よりも快適に過ごしていただけるように「おもてなしの心」を届けることを心がけて準備・運営にあたってきました。至らぬ点もあったことと思いますが、皆様に大きな研究成果とともに、私たちの思いも持ち帰っていただけると幸いです。

最後に、来年度の三重大会の成功をご祈念申し上げるとともに、皆様方の温かいご支援・ご協力に心より感謝を申し上げ、閉会の挨拶とさせていただきます。誠にありがとうございました。



次期開催県代表あいさつ

三重県小学校部会長 稲垣 隆

皆様こんにちは。ただいまご紹介いただきました、次期開催地三重県の小学校長会を代表し、皆様方に心をこめてご挨拶を申し上げます。

第47回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究愛知大会は、平成20年度から引き継がれてきた大会主題のもとで、知・徳・体の三つの密接なかかわりあいを大切に、未来に向かって生きる力の育成を目指して開催されました。そして今日、優れた研究と実践をもとに、二日間の充実した研究協議を経て、成功裏にその幕を閉じようとしておられますことに心からのお喜びを申し上げます。

本大会の開催にあたりましては、愛知県小中学校長会の皆様方に、誠心誠意のお世話をいただきまして、これまでのなみなみならぬご苦勞に改めて敬意と感謝を申し上げる次第でございます。本当にありがとうございました。そして、本当にご苦勞さまでございました。

さて、次年度開催されます第48回の教育研究大会は、日本人の精神文化・生活文化の源ともいわれ古くから心のふるさととして人々の心を魅了してまいりました三重の地で、第65回全国連合小学校長会研究協議会三重大会を兼ねて開催いたします。この三重大会は、愛知大会のすばらしい研究成果を着実に受け継ぐと共に、これまで積み重ねられてきた教育研究の成果に学びながら、教育の普遍的な使命を果たすと共に、新たな時代の要請に応える教育の創造を目指し、平成25年10月17日・18日の両日に開催いたします。

また、この三重大会からは、大会主題が「新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進」に変わります。そこで、本県では、この新しい大会主題に迫るために「豊かな未来を切り拓き、夢に向かい共に生きる子どもが輝く学校経営の推進」を副主題に決めました。そして、信頼・絆を大切に、教育における不易と流行を見極めつつ、子どもの未来を拓く教育のイノベーションをキーワードに、五つの研究領域に13の分科会を新たに設置すると共に、各分科会における研究協議にいつそうの深まりと広がりを求め、学校経営に責任をもつ校長の役割や指導性を究明し、大会主題の実現を目指したいと考えております。

次年度、この三重大会を伊勢市の三重県営サンアリーナをメイン会場に開催いたしますが、この大会には東海・北陸地区から約1000名の皆様が、全国からは合わせて約3000名の皆様にご参加いただく予定でございます。私たちは、縁（えにし）、つまりご縁あってご参加いただく皆様に三重の心でもあります「おもてなしの心」と「おかげの心」をもってお迎えしたいと思っております。また、この三重大会の会場となります伊勢市・鳥羽市は、豊かな自然の中にあり、伝統文化が息づく全国的にも有名な観光の名所でもありますことから、ご参加いただく皆様には、三重の教育とともに美し国（うましくに）、そして人々に愛され親しまれてきた三重の魅力的な自然や文化にも触れていただけないかと、今から皆様のご来県を楽しみにしているところでございます。そのためにも、ご参加いただく皆様には、豊かな自然や観光地の賑わいの中で、交通アクセスや宿泊にご不便やご不自由をおかけしないように、また、ご縁あってご参加していただく皆様が、三重大会を通してよりいつそうの絆を深めていただけるようにと、参加方法等でご負担はおかけしますが、会場移動はシャトルバスで、宿泊は大人の修学旅行をイメージし、都道府県ごとに集団でなど、大会運営にも創意工夫をこらし、皆様をお待ちしております。私たちは、この三重大会を縁（えにし）によって結ばれた参加者同士が、子どもが輝く未来づくりに向けて新たな知を拓き、教育のイノベーションを生み出していく、そんな意義ある大会にしたいと願い、大会コンセプト「縁（えにし）、おかげさま、そして新しいあゆみへ」といたしました。三重大会によせる、こうした熱い思いで胸をいっぱいにしなが、皆様に三重の地でお待ちしております。

「ようけおない、三重に」次年度、三重・県営サンアリーナで皆様にお会いしたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

愛知大会スナップ



名古屋国際会議場(名古屋市)

分科会

**第四十七回 東海・北陸地区連合小学校長会
教育研究愛知大会**

◆日時 平成二十四年十月十八日午前十時～

◆場所 名古屋国際会議場

分科会

- 第1分科会：1号館
- 第2分科会：1号館
- 第3分科会：2号館
- 第4分科会：2号館
- 第5分科会：1号館
- 第6分科会：2号館
- 第7分科会：2号館
- 第8分科会：1号館
- 第9分科会：2号館
- 第10分科会：1号館
- 第11分科会：2号館
- 第12分科会：2号館
- 特別分科会：2号館

第9分科会 <家庭・地域・異校種等連携>

信頼される学校づくりに生かす、
家庭・地域・異校種等との連携

(1) 家庭・地域社会との連携による相互理解と
信頼される学校づくりの推進と校長のリーダーシップ
(2) 幼保小中連携を生かした教育活動の推進と
校長のリーダーシップ

2号館	4号館
<p>10時00分～10時15分 開会式</p> <p>10時15分～10時30分 第9分科会 開会式</p> <p>10時30分～10時45分 第9分科会 基調講演</p> <p>10時45分～11時00分 第9分科会 基調講演</p> <p>11時00分～11時15分 第9分科会 基調講演</p> <p>11時15分～11時30分 第9分科会 基調講演</p> <p>11時30分～11時45分 第9分科会 基調講演</p> <p>11時45分～12時00分 第9分科会 基調講演</p> <p>12時00分～12時15分 第9分科会 基調講演</p> <p>12時15分～12時30分 第9分科会 基調講演</p> <p>12時30分～12時45分 第9分科会 基調講演</p> <p>12時45分～13時00分 第9分科会 基調講演</p>	<p>10時00分～10時15分 開会式</p> <p>10時15分～10時30分 第9分科会 開会式</p> <p>10時30分～10時45分 第9分科会 基調講演</p> <p>10時45分～11時00分 第9分科会 基調講演</p> <p>11時00分～11時15分 第9分科会 基調講演</p> <p>11時15分～11時30分 第9分科会 基調講演</p> <p>11時30分～11時45分 第9分科会 基調講演</p> <p>11時45分～12時00分 第9分科会 基調講演</p> <p>12時00分～12時15分 第9分科会 基調講演</p> <p>12時15分～12時30分 第9分科会 基調講演</p> <p>12時30分～12時45分 第9分科会 基調講演</p> <p>12時45分～13時00分 第9分科会 基調講演</p>





全体会

**第四十七回 東海・北陸地区連合小学校長会
教育研究愛知大会**

全体会

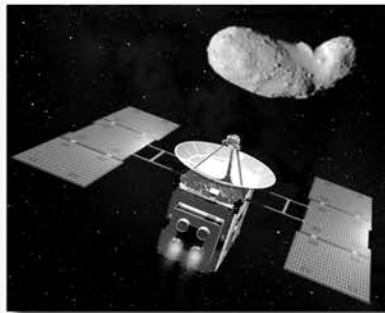
◆日時 平成二十四年十月十九日 午前九時～

◆場所 日本特殊陶業市民会館

〈主催〉
東海・北陸地区連合小学校長会
愛知県小中学校長会

〈後援〉
愛知県 愛知県教育委員会
名古屋市 名古屋市教育委員会
全国連合小学校長会





編 集 後 記

伝統的な産業からの「ものづくり文化」を継承し、近代的産業の発展と、さらに未来に向けた先進的な産業がさかんな「ものづくり愛知」に、1400名を超える校長先生方にお集まりいただき、第47回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究愛知大会を成功裏に終えることができました。これも参加していただいた校長先生方のお陰と深く感謝申し上げます。

本大会主題「新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進」は、平成20年度から今大会まで引き継がれ、この愛知大会は最終年度となる総括の大会と位置付けられました。この大事な締めくくりの研究大会で、それぞれの研究実践をもとに、熱心な研究協議を通して、数多くの成果や課題が明確になりました。

ここに改めて、各分科会で研究実践を発表していただきました校長先生方、また熱心にご協議いただきました皆様方に厚くお礼申し上げます。

本大会報告書が、校長先生方の学校運営に少しでもお役に立てれば、大変うれしく思います。終わりにりましたが、校長先生方の今後の益々のご活躍と次期三重大会のご成功をご祈念申し上げます。

愛知大会研究部編集係

第47回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究愛知大会

愛 知 大 会 報 告 書

編 集：愛知大会研究部編集係

発行者：愛知大会会長 坂野重法

発行所：東海・北陸地区連合小学校長会

愛知県名古屋市中区新栄一丁目49番10号

愛知県小中学校長会事務局(愛知県教育会館6階)

TEL 052-261-8152

FAX 052-261-6807

Eメール ai-kocho@axel.ocn.ne.jp